

『ユメクイ』

柏原康馬

『ユメクイ』

瞳を閉じた空はどこまでも黒くて、吸い込まれそうなくらい透き通っていた。

永遠という言葉がこんなに似合うものは他に存在しないと思える程に、夜空はどこまでも、そのすそ野を広げている。

『永遠の命』と言う言葉は存在するけれど、『永遠の命』なんてものは存在しない。

そんなことを考えていると、誰かにどこかで聞いたことのある言葉が浮かんできた。

(人の命はね、限りあるからこそ美しく映えるんだよ)

なぜだか溢れてきた涙がこぼれないように、込み上げる感情の雫をこぼさないように、少女は夜空を見上げていた。涙は少女の頬を伝わらない代わりに、少女の視界を滲ませた。やんわりとぼやけたレンズを通して見上げた景色は、あることを教えてくれた。

「夜空って、明るいな……」

涙で滲んだ視界は漆黒に覆われることなく、薄明かりで満たされた淡い世界が広がっている。

「きれい……」

純粋な感想をもらすと同時に、フツと瞬きをした。たった一度の瞬きだったけれど、少女の涙は両目の端からこめかみを伝って流れ落ちていった。つうと通った雫の軌跡を感じながら、もう一度、静かな空を見つめてみる。

「届くかな」

凜とした闇に輝く星たちを見つけて、手を伸ばしてみた。

「やっぱり、届かないよね……」

暗がりの中で、ぼんやりとした白銀^{はくぎん}とも言える光をはべらせながら輝く星たちの、その明るさに目がくらんだ。でも、少女はその輝きを掴みたいのではなかった。

「お星さまって、強いよね」

黒のキャンバスの中でも、懸命に自分を主張し続けるその力強さが欲しかった。暗闇の中でも見失うことのない確かなものが欲しかった。

「残念だなあ」

がっかりしたはずなのに、なぜだろう。薄い笑いを携えながら、少女は頭^{こうべ}を垂れていた。

「あっ」

空ばかり見上げていたので気付かなかったけれど、眼下にも星たちが散らばっていた。こうこうと輝く星もあれば、流れゆく星もある。夜空に触れることはできなかったけれど、眼下に広がる景色なら触れられるような気がして、透き通ったように美しいその指先を伸ばしてみる。

「何で届かないんだろう」

空にも触れないし、眼下にも触れない。そんな自分は何なんだろうと首をかしげているうちに、硬い感触が両足を支えていた。歩道の確かな感触を踏みしめながら、地上の星の正体に気付いた。車道を駆け抜ける車やバイクのヘッドライトが星のように見えたのだ。街のざわめきや騒音を冷たく跳ね返すオフィスの窓から漏れる蛍光灯の明るさが、星のように見えたのだ。

「なんだ……」

心の底からがっかりした。車の騒音にかき消されそうなくらい自分の存在を希薄に感じていたからだろうか。すれ違う車から次々に浴びせられるヘッドライトがとても痛かった。代わる代わる自分を照らしているのに、誰も自分のことなど気に留めていない現実。こぼれた砂糖に群がるアリのように、数えきれないくらいたくさんの人がいるにもかかわらず、自分の声を聞いてくれる人はいなかった。

「お母さん……」

大きな塊となって移動する人の波が自分の存在を無視するかのようすりに抜けていく。そんな感触が何とも寒々しくて、心にぽっかり空洞ができてしまったような気がして、母親の名前を呼んでみたけれど、返事は返ってこなかった。

「お父さん……」

大きなその手で自分を迎えてくれるはずの父親の名前を呼んでも結果は同じだった。通り過ぎる人、一人一人が自分の帰るべき場所、あるべき場所へと帰っていく。

「お兄ちゃん……」

やっぱり返事はない。自分の帰るべき、あるべき場所はどこなんだろう。ぼんやりと思い出せるのに、はっきりと思い出すことはできない。どうせならきれいさっぱり忘れてしまっている方がよかった。その方が踏ん切りをつけやすいだろうから。気持ちを切り替えやすいだろうから。

「私は……」

あまりの寂しさに忘れてしまいそうだったから、これだけは忘れなくなかったから、抱きしめるようにして自分の名前を口ずさむ。

「ゆうなぎ、みその」

外気の温度とは無関係に震える自分を抱きしめて、少女は待っていた。
自分をさらってくれる温かな手を。

「私、何か忘れてるような……」

体の中心を空気がすり抜けていく感触はとても悲しい。

「何か……大切なことを……」

どんなに考えても、それが何なのか思い出すことはできなかった。

雲間から覗くいつもと変わらない穏やかな月が、世界を優しく包み込んでいた。

「なあ、孝司^{たかじ}～、そろそろ歩こうぜ～。俺もう疲れて走れましえ～ん」

高校に入学したばかりの芽キャベツのように初々しい新入生たちが迎える四月の体育と言えはマラソンだ。他の高校ではどうだか知らないが、少なくともこの納^{のうりょう}陵高校では、フレッシュマン＝マラソンという普遍方程式が成り立ってしまっている。もはや、牛乳は牛の乳から搾り取られているという事実ぐらい常識なのだ。

「ああ。いいぞ。俺も疲れた」

常識だからと言って全ての生徒がくそ真面目なハムスターのように校舎の周囲をグルグル走っているわけではない。体育教師が目を光らせている校門周辺以外は軽く流すという術^{すべ}をさすがに高校生ともなれば身につけているわけで、自分の体力の限界にチャレンジしてやろうなんて熱いハートを持っているやつは、はっきり言って少数派だ。

だから俺がクラスメイトである尾村^{おむらゆうた}佑太の誘いを受けてへろへろ歩いてたって、なんら異質な光景ではないのである。でもやっぱり、腕くらいは大きめのアクションでふっておこうかな。

「いつまで俺らの体育はマラソンなんだ？ もうさすがに飽きた～」

尾村の言うことももっともなのだが。

「俺は最初のマラソンの授業から飽き飽きしてたぞ」

「確かに」

俺たちが高校に入学してから三週間経ったというのに、未だに体育の内容がマラソンというのはいささか腹立たしかった。三週間も停滞していたら世界情勢から取り残されてしまうよ。まあ、それとこれとは全く関係ないんだけどな。

「おい、そこのお二人さん。しっかり走れよ。爽やかな汗ってのは気持ちいいもんだぞ」

爽やかな風のごとく、俺と尾村の間をすり抜けていく少数派代表みたいな男がそこにいた。

「立也^{たつや}、お前あと何周だよ？」

俺の声に振り返る様は日本さわやか選手権に出場させてやりたいくらいの極上の爽やかさだ。ところでそんな選手権は存在しているのだろうか？

「これがラスト一周だ」

「マジかよ！」

尾村が声を上げるのも無理はない。俺たちは二周も差を付けられていたのだから。

「しょうがないさ。俺らもチビチビ走ろうぜ」

「はあ……」

ヨレヨレのじいさんみたいな格好でマラソンを再開した俺と尾村は、教師の前だけ、青春まっしぐら！というくらい猛烈なダッシュを見せつけ、角を曲がるや否や競歩に転向という、忍者もびっくりなくらいのはやわざで何とか体育の時間を乗り切った。

来週からは数種目の球技に分かれて授業が進むそうだから、俺たちの憂鬱な時間は一つ削除

されたと言ってもいいだろう。

今日の体育は昼休みの前にあった。つまり、今は昼休みと言うことになる。

高校に入学してまだ三週間しかたっていないのだが、クラスの全員と初対面と言うわけではなく、同じ中学に通ってたやつらもちらほらいたので友達作りに苦心する必要はなかった。

とは言っても、男子は女子ほど人間関係が複雑ではないので、三週間もあればなかなかいい感じに親交を深めていたりもする。実際、俺はクラスの男子の八割とは既に軽い会話を交わしている。

「孝司、お前来週の種目なに？」

「ソフトボール」

「おお！同じだぜ」

「そうかよ」

俺と尾村は同じ中学出身であるからして、会話に新鮮味というものが無い。

「俺は卓球だぞ」

爽やかな声は ^{いけなかつや} 池中立也のものだ。こいつとは高校に入ってから知り合った。立也のような人種とは初めて出会ったので、いろんな意味で新鮮だった。

「お前卓球が得意なのか？」

体育の前期の選択種目はソフトボール、バスケ、卓球、の三種目であり、毎年のように卓球の希望者がずば抜けて多らしく、大所帯となること必死であった。どうやらその理由は、激しいスポーツが苦手な連中がこぞって参加するからであるようだ。

ということは、この爽やか少年が運動嫌いなのかと言うとそうではなく、むしろ何でもそつなくこなすタイプの人間のように見えた。これはあくまで俺の主観なんだが、あながち間違いでもないだろう。加えて、こいつは教師側の事情を ^{くみ} 与えるような、いわゆる優等生タイプの人間である。これについては既に裏付けが取れていて、その証拠は、立也のこのクラスにおける役職に表れている。何を隠そう、池中立也は我らが一年七組の学級委員なのである。しかも、誰かに推薦を受けたわけではなく、グダグダになるであろう空気を察してか自発的な立候補によるものだった。

したがって、こいつが卓球を選択していることにはいささか違和感を覚えてしまうのだ。

「お前らにはまだ言ってなかったが」

百点のテストを見せびらかしたくて仕方ない小学生のような笑みと仕草で。

「アイ・ラブ・卓球なのだよ」

爽やか一転、超気持ち悪いことをさらりと言ってのけやがった。天才とバカは紙一重ってのを聞いたことがあるが、爽やかさと気持ち悪さも紙一重のようだ。しかも、こっちの紙はかなり薄いようです、はい。

そんなこんなで俺と尾村が顔面の筋肉を引き攣らせていると、

「ちいっす。購買、超込みだぜ」

机を寄せ合わせていた俺たちのところに椅子だけ持って現れ、ドカッとためらいなく座り、行儀悪く足を組みだす男が現れた。

「おう、^{とうま}斗真。また購買か。弁当作ってもらえばいいだろ」

「めんどくさいんだと」

「じゃあ、自分で作るとか？」

「無理無理。起きるのに必死」

「じゃあ、コンビニに寄ればいいだろ」

「その時間すらねえ。朝はマジ必死」

どんだけ必死なのか見てみたい気もするのだが。

「そう言えばお前、体育の時間どこにいたんだ？」

マラソン中に抜いた記憶もなければ抜かれた記憶もない。そもそも、スタート地点にすらいなかったように思うのだが……。

「保健室」

サボったな。こいつ、入学早々サボタージュしやがった。まったく、いい度胸してるよ。

だがまあ、言い訳の一つくらいは聞いてやることにしよう。

「風邪でも引いたのか？」

「いやいや、全然元気」

「じゃあ、あれか、怪我でもしたか？」

「まさか。全然無傷」

「じゃあどうしたんだ？」

ここまで来れば聞くまでもなかった。斗真は背もたれに優雅にもたれかかり、行儀悪く組んでいた足もスツとわずかに動かし上品な足組へと変化させる。口の中でモグモグさせていた焼きそばパンを紙コップのジュースで流し込み、フウと一呼吸置いてからクールに言い放った。

「仮病だ」

知ってたよ。こんなにためを作らなくてもわかってたよ。

「昔から思っていたが、斗真、お前はけしからんやつだな」

いつの間にか腕組を決め込んでいる立也が物申した。ちなみに立也と斗真は同じ中学出身だ。性格が真反対のように思えるこの二人は一見すれば反りが合わないように思われるのだが、実際は二人でいるところをよく見かけたりする。楽しげに会話を弾ませているわけではないのだが、^っ即か^{はな}ず離れずといった感じでたまに言葉のやり取りをかわしているようだ。

「うるせえよ」

立也を一言であしらった斗真は、再び焼きそばパンにかぶりついた。

「斗真は来週の体育、何やるんだ？」

この質問したのは尾村だ。種目の割り振りは入学早々のオリエンテーション時に用紙が配られ、その時に記入して提出したものを教師側が無作為に抽選して決定するとのことだったので、今日の体育を休んだところでこの件について困ったことにはならないのだった。

「バスケ」

「なるほどね～」

何かなるほどなのか説明してほしいところだがここはスルーしておこう。

まあ、こんな感じで毎日楽しくやってるわけだよ。高校に入学したからって何かが劇的に変わるもんじゃないらしい。勉強だって受験が終わってからこの方ろくにやった覚えはないし、初めの方は緊張して受けていた毎日の授業も、今となっては保育園児のお昼寝の時間と等価な存在になり下がってしまっている。テスト期間が始まると地獄のような日々になってしまうのだろうな。いつだって、コツコツ勉強した方が後々楽だってことはわかっているんだが、なかなか実行に移せないのはなぜだろう。脳味噌と指先をつなぐ神経がいかれてしまっているのだろうか。誰か直してくれ。頼む。

しかし、中学の時とはだいぶ印象が変わったところもある。

高校生という肩書を手に入れたヤツラは、別段どこか成長したわけでもないのに何となく大人っぽく見えてしまう。制服のせいなのだろうか、それとも、ほんのりと化粧をしているせいなのだろうか。

詰まるところの、女子と言う存在だ。

「ねえ、タカジイはどここの部活に入るか決めた？」

授業が終わり、帰りのホームルームまで少し時間が空いたので、自分の席に大人しく座り、ぼんやり窓の外を眺めていた俺は、後ろから投げかけられた中学の頃からよく知っている声に引っ張られ、クルッと九十度ほど体を回転させた。

ちなみにタカジイとは俺のことで、俺はこのあだ名をあまり歓迎してないのだが、「そのあだ名やめろ！」と言えは言うほど面白がって、「タカジイ」と呼ぶので、無駄な抵抗はしないことにしているのだ。

「まだ決めてない。体験入部の期間っていつまでだっけ？」

納陵高校では必ずしも部活に入らなければいけないというわけではないのだが、ほとんどの生徒がどこかの部活もしくは何かしらの団体に所属している。あの斗真ですら、すでにサッカー一部に入部届けを提出しているくらいだ。

「えーっとね、確か今月中だったよ」

「あと一週間か。お前はどこに入るか決めたのか？」

お前と言うのはときねゆうり時音友里のことですて。

「まだ決めてないんだけどね」

「どこか気になる部活でもあるのか？」

「面白い所があるらしいのよ」

時音は席に座ったままグッと体を乗り出して、これからいたずらでも仕掛けるかのごとく、ランランと両目を輝かせている。結構近い距離でこの目を見てしまった俺はちょっとだけドキッとしてしまった。何たる不覚。

「どこの部活だよ？」

「それがね、部活じゃないらしいの。研究会なんだって。今日の放課後に行ってみない？」

そうそう、この高校の変わったところは、研究会のようなちょっとしたサークルがちらほら見受けられる点だ。部活と同じように、教室まであてがわれているサークルもあるそうだから、教師側は何かと寛容なのかもしれないな。その寛容さを日々の宿題に発揮してくれたら何とも有難いのだが、この件に関しては全校生徒分の署名を集めたところで俺たちの願いは聞き届けてもらえないだろう。

「なんて言う研究会なんだ？」

俺は最初野球部に入部しようと思っていたのだが、野球部の規則としてボウズ頭にしなければならぬとのことだったので、入部は断念した。ボウズにすると、いろいろ寂しくなりそうだったし、そもそも俺が野球部に目をつけていたのだから、自分が中学の時に野球部に入っていたからなんとなくそのノリで高校でも続けてみようかな、ってな具合の軽い動機で、熱血高校球児みたいに、俺の青春は甲子園に捧げる！みたいな心持ちにはなれなかったからだ。その後とくに興味を引かれる部活がなかったから、あれこれ体験入部を試みたのだが、やっぱりこれと言う部活を見つけることはできなかった。幸い俺と仲のいい連中も大半は入部届けを提出しておらず、未だ模索状態にあるのでそれほど焦りは感じていなかった。

しかしまあ、気付いてみれば体験入部の期間はあと一週間しか残っていないわけで、どこかしこの団体に一日だけでもお邪魔するというのは嫌ではなかった。

「正式名称はわかんないんだけどね、」

時音は俺の目を見たまま、何とも気持ちよさそうに言い放った。

「『おフロ研究会』、だって」

。

「えーっと、この辺って聞いたんだけどな〜」

俺と時音は『おフロ研究会』とやらを訪問することにしたのだが、研究会の名前を聞いた瞬間、俺は興味を失ってしまった。略称だとしても、名前の通り考えれば『お風呂』を研究する会ってことになる。俺は別段お風呂好きというわけではないし、温泉だって行ったことはあるのだが、一日六回入る程の温泉狂というわけではない。風呂はお湯につかって温まって、体を洗うためのもの。それくらいの認識しか持っていないわけで、特に語り合ったり考察を深めるようなものだとは思っていない。

それでも俺が南館まで足を運んでいるのは、「面白いらしいんだってば！来てよ！」という時音の強引な説得の賜物なのである。こいつが数ある生徒の中からわざわざ男子の俺を誘ったということは、他の女子どもには全員一様に「ノー」という返答を返されたのだろう。その時点であきらめればいいのに、なお食らいつくこいつの根性には拍手を送ってやりたい。しかし、そこまで強い意志があるのなら一人で体験入部すればいいんじゃないのか？俺ならゴリ押しでもすれば無理がきくとも思ったのだろうか。まあ実際きいているわけだが。

「おい、もしかしてここじゃないのか？」

ドアの前には『おフロ研究会』と書かれたかまぼこ板が垂れ下がっていた。もうちょっと洒落た看板を作った方がいいんじゃないかな。遣^やっ付け作業が見え見えなんですけど。

「でかしたタカジイ！」

大声出すのはやめてくれ。アホみたいなあだ名が廊下に響くから。

「じゃあ、入ろっか」

と言って時音はドアを開け、

「すいませーん！見学させていただきたいのですがー」

そのままズカズカ入っていった。

俺もその後が続いて入ってみると、

「あっ！お前！こんなところで何やってんだよ！」

ものすごく見知った顔を発見した。

「な、な、な、何してんだよ孝司！」

向こうも驚いたようで、タラバガニは実はカニではなくヤドカリの仲間なんだと知った時のような、目ん玉飛び出すんじゃないかと思うほどの形相でこちらを見ていた。

「あれま、礼^{れい}二じゃないの。ここの団体に入ってたわけ？」

一年四組にあてがわれた長^{なが}滝 礼^{れい}二は俺や時音と同じ中学出身で、もっと言えば、俺の大親友である。

「ま、まあな。お前らこそ何やってんだよ」

ズカズカと部室に入ったはいいものの、礼二以外の人影は見当たらない。

「礼二、一人なの？」

「まだみんな来てないだけ。ここには先輩二人と、俺を合わせた新入生二人の合計四人が所属してる」

「よくそんなマイノリティ・グループで活動中止にならないもんだな」

「部室が余ってるからだろ。たぶん」

そう言うとき礼二は俺たちを部室においてあったパイプ椅子へと座るよう促した。

何だか落ち着いてきたところで礼二へと質問を投げかけてみた。

「お前なんでこんなわけのわからん研究会に入ったんだ？そんなにお風呂が好きなのか？」

「いや、孝司、お前は大きな勘違いをしている。そもそも……」

礼二が何やら俺の誤った認識を訂正しようとしていると、

「おはよう諸君。昨日はいい夢見れたかな？」

威勢良く扉を開き、エネルギーの浪費としか思えないくらいの馬鹿でかい声をかけ飛ばしながら、上級生らしき人物が入ってきた。

「おやおや、入会希望者かい？しかも二人も。いや～うれしい限りだね～」

その先輩らしき人物はキョトンとしてしまった俺と時音を見て、

「ああ、自己紹介が遅れてしまった。僕は『おフロ研究会』の会長をやっている、^{ばくともかず} 獭智一だ。三年一組。よろしく」

獭先輩は俺と時音の手を強引に取り、握手をしてきた。

この先輩のハイテンションに圧倒されてしまったが、このままでは俺たちは、お風呂大好き人間の一人にされてしまう。

「あ、あの、獭先輩とやら、俺たちは見学しに来ただけでして、その、まだ入会するかどうかはわからないんですが」

申し訳なさそうな仕草を演出してみた俺に向って、このハイな先輩は、

「ノープロブレムだよ、諸君。わが『おフロ研究会』には細かい手続きなど存在しない。自分が『おフロ研究会』に入っていると思えば、その人は誰でもここの会員なのだよ。書類上の手続きはないから安心したまえ」

なんつー適当な研究会なんだここは。

さっきから隣にいる時音は笑っぱなしだし、ふと見た礼二も俺たちを紹介するわけでもなくダルソーにこの光景を見つめているだけだ。

ったのだが、

「え、^{えびさわ}海老沢先輩。こ、こ、こんにちは！」

ハイな先輩の後ろから、何ともきれいな女性が現れた。そう、この場合は女子と言うよりも女性と言った方が正しいのだろう。制服をこんなにも大人っぽく着こなしている人は初めて見た。老けているとかいうのとは全く違う。大人の香り満載だった。

「海老沢先輩、きょ、今日もいい天気ですね」

礼二よ、お前は何かと分かりやすいやつだな。どうやらこいつはこの先輩目当てでここに入ったと見て間違いないようだ。不純だとは言わないさ。これも青春ってやつなんだろ？

「そうね。ところで、この子たちは誰？不審者なら追い出すけど」

皆さん、人は見た目で判断してはいけません。この先輩、超美人な反面、超怖いです。

「名乗りなさい」

海老沢とかいうこの、見た目美人、は、腕組みをしたままの仁王立ちという、阿修羅像もびっくりなくらいの眼力で俺たちを睨みつけてきた。おまけにマイナス三度の冷たい声で威嚇するもんだから、俺と時音は直立不動のまま凍ってしまっていた。

「そんなに怖がらせちゃだめじゃないか、エビちゃん。彼らは僕たちの新しい仲間なのだよ。もっと歓迎してあげなくてはだめだろ？」

近所の子供にやたら噛みつく飼い犬をなだめるかのような仕草で割って入ったハイな先輩が、このときばかりは何とも有難く感じた。

「そうだったの。ごめんなさいね」

敵意はなくなったのだが、やっぱりこの先輩は怖い。……ってことは、あれか、礼二はその……………エムだな。付き合いは長かったが気付かなかったぞ。

てか、俺たちはもう、お風呂大好き人間の一部に取り込まれてしまったらしい。今から否定するとまた冷凍保存にされてしまう目にあいそうだったので、この際、どうにでもなれという感じだった。書面手続きがない分かなり気楽だしな。

いきなりのドタバタ劇がひと段落を迎えると、

「新人君たちもいるわけだから、メンバー全員そろったら、改めてこの研究会の活動方針でも説明することにしよう」

会長と女王様はパイプ椅子に腰掛け、残り一人の会員を待つようだ。

「時音はいいのか？俺たち、もうメンバーの一員にされちゃったぞ」

小声で訊ねると、

「いいわよ。だって、面白そうじゃない」

「何が面白そうなんだ？まだ活動内容聞いてないぞ」

「雰囲気」

まあ、退屈はしないかもな。

二人だけ立ちっぱなしっていうのもおかしいので、俺たちは礼二の隣に腰かけた。

「よお、エムジ」

礼二にしか聞こえないくらいのボリュームでからかってみた。

「なんだよ、その呼び方」

「お前、あのエビちゃんとかいう先輩が好きなんだろ？」

「エビちゃん言うな！その呼び方は俺の夢だぞ！」

「小さい夢だな。今日からお前に対する見方が変わったぞ」

「う、うるさい」

そんな二人のヒソヒソ話が気になったようで、

「何の話してるのよ？私も混ぜてよね」

時音が絡んできて、ますますからかいがあるなあ、なんて思っていると、

「ごめんなさい。遅れちゃいました」

最後の一人がやって来た。

「あれ？新しいお友達ですか？」

ほんわかした声で訊ねているのは、礼二の紹介によると ^{ながさわ るり}長沢 瑠璃という名の女の子だった。

「違うのだよ、瑠璃くん。彼らは我らの新たな同士なのだよ」

ハイが即座に訂正した。この先輩に対する呼び方が悪くなってるって？それは気のせいさ。

「そうなんだあ。よろしくお願いします」

小さくパチパチしながら、スカートの裾をふわふわ危なっかしくさせている様子はかなりの癒し系だった。

「よし、全員そろったな。それでは、これより我らが『おフロ研究会』の活動方針を説明したいと思う。みんな、よく聞くように」

ハイが立ち上がり、説明を始めようとする、

「会長、まずは自己紹介から始めるべきだと思います」

エビちゃん先輩が進行を妨げた。

「それもそうだな。では改めて、三年一組、『おフロ研究会』会長をやっている獭智一だ」

続きまして、

「二年五組、『おフロ研究会』副会長の海老沢美里奈です」

この先輩には早く慣れたいものだ。慣れればかなりの絶世美女だからな。今は雪女にしか見えないけど……。

「一年四組、長沢瑠璃です。よろしくお願いします」

勢いよくお辞儀するもんだからまたもやスカートの裾が危なっかしいことになっている。目のやり場に困っているのは俺だけではないはずだ。

この後、礼二と時音が自己紹介を済まし、俺の順番が回ってきた。

「一年七組、^{ながみね}永峰 孝司です。温泉＋浴衣＝卓球、ってのは全国共通の方程式だと思ってます。よろしくお願いします」

残念なことに俺の自己紹介についてコメントをしてくれる人は誰もいなかった。礼二の方をちらりと見てみたが、自分で処理しろ、見たいな視線を送ってくる。なんて薄情な奴だ。

そして、俺が散らかしてしまった沈黙を無かったことにするかのごとく、数秒前と何ら変わるころのないテンションを維持したままのハイが研究会の説明をし始めた。

「それでは孝司君、『おフロ研究会』ではどんな活動をしていると思うかね。当ててみたまえ」
いきなりクイズ形式ですか。せめて三択問題にしてもらいたいところだが、名称通りに考えたらこれしかない。

「お風呂について語り合うんですよね？湯加減とか体のどの部分から洗うのかとか。もしかして、夏合宿、冬合宿があって、温泉旅行に行ったりするんですか？それなら俺は大賛成ですよ。旅費だって、少々高くても文句言いませんし」

意気揚々と答えたのだが、

「だから違って……」

礼二の小声もむなしく、

「ふざけてると蹴り出しますよ」

雪女に睨まれた。俗に言う冷凍ビームってやつだな。

「なかなか面白い冗談だ。でもな、孝司君、我々の活動方針とは程遠い解答だよ」

じゃあ、お風呂場の洗い方を極める集団とか……なんて言おうとしたのだが、これ以上雪女を刺激するのはよくないと思われたので自粛しといた。

「では、友里君はわかるかね？」

時音は、何かボケてみる、と言う俺の視線を余裕で無視して、

「わかりません」

と答えた。ノリの悪いやつだ。賢明とも言えるが。

「そうか。それならば仕方無い。僕の口からこの『おフロ研究会』の活動方針を語ることにしよう。そもそも、我が研究会の正式名称は——」

そのままハイは、部室に置いてあったホワイトボードのところまで歩み寄り、青色のペンででかかど文字を書きはじめた。そして俺は知ったのだ。このわけのわからん『おフロ研究会』とやらの正式名称を。

さあみなさん、ご傾聴あれ。『おフロ研究会』の正式名称は、

「『フロイト研究会』」

だそうだ。どーゆう略し方してるんだ！なんてツッコミは後回しにして、率直な感想を言えば、結構ちゃんとしたとこだったんだな、ここは。

そしてもう一つ、誰もが気になる点に触れておこう。

「『おフロ研究会』の『お』はどこから来たんですか」

「僕も知らん。誰かが付けたのだろう。最初からこうだった」

ハイが雪女に目線をやると、

「その通りです」

何か文句でも？というメッセージ付きの視線が突き刺さってきたので、もうこれ以上の追及はできません。あしからず。

なが遊んでいる中でも、一人で考察を深めるため、読書にふけっているくらいだからな。

こうして、晴れて(?)俺と時音も『おフロ研究会』の一員となったのだった。

○

『おフロ研究会』というただ遊ぶためだけに存在しているサークルに入ったせいなのだろうか。時間がたつのがやたらと早く、振り返ってみればゴールデンウィークなるものを通過してしまっていた。

結局俺は部活に入ることなく、この研究会に落ち着いた。どうせ遊ぶのなら俺と仲のいい奴らも引き込んでやろうと試みたのだが、斗真はサッカー部だし尾村はハンドボール部に入るとのことだったので、この二人については断念した。立也は最後までどこの部活にするのか決めかねているようだったので、来る日も来る日もこの『おフロ研究会』の面白さについて語り、それでもまだ渋い表情だった立也を何とか部室まで連れ込んだのだ。すると、意外なことなのか必然的なことなのか判断はしかねるが、ハイと立也は意気投合してしまい、すんなりこの研究会に入会することを決めたのだった。

雪女との関係はどうなったかと言えば、むやみな威嚇をくわなくなったという程度でしかないが、軽い会話を時折交わしたりもする。この前したのはこんな会話だ。

「永峰、あなた、昨日はどんな夢を見たのかしら？」

いきなり聞かれたので、思い出すこと数秒、さっくりと大雑把な概要だけ説明してみると、
「あなた！」

お化けでも見たかのような驚きようで、

「それはエロスよ」

そんな言葉をさらりと言ってしまうあなたがエロスです！

なんてことはもちろん言わなかったのだが、綺麗な顔の女性に真面目な顔で「エロス」なんて言われたもんだから、俺の方が赤面してしまった。

部室の中で真面目な顔しているのは彼女だけで、あとの奴らは各々家からトランプやウノやオセロといった定番ゲームを持ち寄り、ワイワイすごしているのだった。

俺は、男女仲良く過ごす高校生活が、こんなにも早々に訪れるなんて予想すらしていなかったので、受験の時くらいしか信じることのない神様に「ありがとうございます」なんてぼやいてみたりもした。

しかしまあこれは後日談なんだが、この時がまさに楽しさの絶頂期で、これを境にウキウキ気分は逡減していくこととなった。そりゃあそうだろう。毎日目的もなく集まって、目的もなく遊んでいれば、だんだん飽きてくるのは当たり前のことなのだ。

そして、この絶頂期に見た俺の夢が、世にも不思議な体験の引き金になってしまったのは何

たる偶然だろう。確率で言えば、全世界の人口を分母に置き、一という数字を分子に乗っけてやるぐらい低い確率で起きたのだ。

世界は案外狭いのかもかもしれないな。

。

俺は無敵だ。

ただ今の状況を説明すると、ピンク色の忍者服を着たやつら数人に周りを取り囲まれている。こいつらは全員敵だ。なぜなら、奴らは背中に隠し持っていた鞘から真剣を抜きだし、その刀身を俺に向けてチラチラと舐めるようにちらつかせているからだ。

「覚悟！」

どこかの時代劇番組のように、ご丁寧に一人ずつ斬りかかってくるなんて要領の悪いことはせず、全員一斉に斬りかかってきた。

一刀の剣でそれら全てを受けきれはるはずはないのだが、ご安心あれ。「ニンニン！」と言えば俺はあらぬところへ瞬間移動できるのだ。

御多分に漏れず、この場面でもその特殊能力を発揮させてもらうことにしよう。

「ニンニン！」

忍者がやっついそうな印を組みながら大声で叫んでやった。

案の定、俺はピンクの忍者たちを置き去りにして、大層な作りをした城の屋根上まで移動していた。気付けば、どこぞの姫様までこの手に抱いている。そう、俺の任務はこの姫様を守ることにある。城主への忠義を果たすため、俺は自らの命に代えてもこの姫様を守ると決めたのだ。

周りに敵がないことを確認し、麗しの姫君の顔を覗いてみると……。

「あなた、エロスよ」

……………俺は雪女を抱いていた。

「けがらわしい！あっちに行きなさい！」

怒号と同時に俺は地面へと蹴り飛ばされた。

「痛てえ……」で済んだのが奇跡と言える距離から落下した俺は、まともやピンクの忍者たちに囲まれていた。

「ニンニン！」

先ほどと同じように叫んだのだが、どういうわけなのだろう、今回は瞬間移動できない。

「やばいっ！」

という声と同時に俺は大きくジャンプした。

そのまま必死に平泳ぎの動作を繰り返していると、あろうことか俺は空を飛んでいた。動作

をやめると落下体勢に入ってしまうことから、空を飛ぶための条件は、平泳ぎをし続けることにあるらしい。

そのまま教科書で見た江戸時代の風景とおさらばすると、遠くに納陵高校が見えてきた。

平泳ぎの動作にだんだん疲れてきた俺は、校舎の屋上に不時着することにした。そしてそこで、俺は見たこともない一人の少女との対面を果たすこととなったのだ。

これがまた、変わった女の子でして。

「面白い夢だね。あんちのウキウキな気持ちが、あちしを幸せな気分にしてくれる」

俺の胸辺りの位置に頭がある小柄な少女は笑顔でしゃべっていた。

「今日はあんちにする」

両手を後ろで組んで、小悪魔がこれからいたずら事をするかのような瞳で俺を見上げている。

「あちしね、」

『無垢』という言葉そのまま擬人化したかのような少女は微笑のままつぶやいた。

「夢、食うんだあ」

俺は一步後退した。一瞬、ゾクッと寒気が走ったから。

しかし少女は俺に食いかかるでもなく、にこやかにたたずんでいた。

「きとお腹いっぱいになる」

うっとりとした少女の表情が俺の警戒心を解き放ち、「君は誰だい？」なんて聞こうかと思って唇を上下させようとしたちょうどそのとき、神風のような突風が吹き荒れた。

突如沸き起こった突風は、少女の跳ねるような水色の髪をさらい、

俺の意識をさらった。

「……うう……、夢か……。って、何の夢見てたんだっけ？……まあいいか、寝よ」

最高級エステに負けずとも劣らないくらい気持ちのいい、二度寝の世界に浸ろうと思っていたのだが、

「……今何時何だ？」

一応確認しておこうと、左手一本で時計を探し出し、時間を見てみると……。

「やべえ！遅刻する！！！！」

我が家を揺らす大声とともに俺の一日が始まった。

遮光カーテンも善し悪しですよ、まったく。

「どうしたんだ？珍しく考え込んじゃって」

問いかけてきたのは尾村だ。

「俺が考え事してちゃ悪いのかよ」

「悪くはないけどさ、珍しいじゃん」

そう、珍しく俺は考え事をしていたのだ。

「何の考え事してるんだ？なあ、教えてよ」

尾村のことだからどうせ、俺が恋煩いにでも落ち入っていると考えたのだろう。

残念ながら尾村の期待には応えてあげられそうにない。

「昨日見た夢がな、思い出せそうで思い出せないんだよ」

へんてこな夢だったことは覚えているのだが、内容が全く思い出せない。なぜ思い出そうとしているのかと問われれば、それこそ全く解答を持ち合わせていないのだが、なぜだか昨日の夢が気になって「う～ん」と唸っているのだった。思い出そうとすれば思い出そうとするだけ記憶が逃げていくような気がして、なんとももどかしい。

「なんだよ。エロイ夢でも見てたんじゃねえの？俺なんて、水の中で溺れてる夢見ちゃってさ。飛び起きて、漏らしてないかを一番に確認したぜ。もちろんセーフだった」

どうでもいいような尾村の夢話をそれとなく聞いていた俺の耳が、あるワードにヒットした。

「水……」

ぼんやりとだが、風に揺れる髪だけが浮かんできた。

「水色の髪」

だが、ここまでが限界だった。

「んじゃ、俺はハンドに行ってくるから。また明日」

「おう。じゃあな」

尾村と別れ、部室にでも行こうかなと思い、でもその前にトイレに行っておこう、なんて思っ
て廊下に出てみると、

「あっ」

俺の視界が一人の少女を捉え、そして、俺の頭の中でぼんやりとしていたものが実像を結んだ
。

「ちょっと！」

跳ねるように通り過ぎていった少女は俺の声など聞こえていないかのような仕草で遠ざかっ
て行ってしまふ。

「だから待ってくれって！」

思わず追いかけてしまった俺が、音符のように弾む少女の肩を掴むと、

「なに？」

昨日の夢の中と同じ顔がそこにあった。俺の記憶が正しければ初対面のはずだ。しかし、たと
え夢の中といえども、全く見たこともない人が現れるほど機知に富んでいるはずもなく、

「どっかで会ったことありましたっけ？」

彼女に答えを求めてみると、

「あちしのこと覚えてるの？」

やっぱりどこかで会ったことがあるようだ。

「どこでお会いしましたっけ？」

すれ違っただけかもしれないが、一応、聞いてみる。

「うわぁ、初めてのケースだよ、これは」

少女はリスのように目をパチクリさせていた。

「体験入部が同じだったとか？いや、なわけないな……」

自分でも何でこんなに必死になっているのかわからなかった。

「びっくりだなぁ」

少女に俺の声は届いていないのだろうか。自分の声帯を疑いたくなるくらい会話が成立していない。ほんと、俺もびっくりですよ。

俺の頭は未だ昨日の夢全部を思い出すことはできていないのだが、この少女とあの言葉だけは記憶を取り戻せていた。

俺は記憶の全てを少女にぶつけてみた。もしかしたら、この言葉が気になったがゆえに俺はこんなにも必死になっているのかもしれない。

「君は、その……、夢を食べるのかい？」

正常な人間にこの質問をしたのなら、一秒とかからずその人は俺のことを、どこか頭のネジが外れてしまったかわいそうな人だと思うに違いない。

俺が、「大丈夫ですか？」という同情のこもった返答に怯えながら、次の言葉を待っていると、

「うん」

まぎれもない肯定の返事が返ってきた。

「あちしは夢食うよ」

現実世界なのか確かめるために自分の頬をつねってみて、痛いという感覚が確認できると、なんだか急に冷静な判断ができるようになっていた。一時は浴びせられることを恐れていた言葉を、今度は自分の方から口走っていた。

「お前大丈夫か？」

「あちしはだいじょおぶだよ」

「いやいや、お前、夢食うんだろ？」

「うん。あちし、夢食うよ」

何かおかしいことでも言いましたか？みたいな表情で俺を見上げていたので、

「よし、とりあえず保健室に行こう」

「なんで？」

「お前、風邪でも引いてるだろ」

「ううん。あちしはだいじょおぶだよ」

少女は元気なところをアピールするためか、ピョンピョン跳ね回って見せるのだが……。

そんな光景が、部活に向かおうとする生徒で溢れ返った廊下にマッチするはずもなく、俺と少女には好奇の視線が向けられていた。

それに気付いた俺は慌てて、

「お前、何か部活に入ってるか？」

「入ってないよ」

「じゃあ、俺についてこい」

「なんで？ん、でも、いいよ」

ぴよこぴよこと俺の後をついてくる少女を引連れて、俺はいつもの場所へと足を運んだ。

○

「いいよ。あちしも入会する」

「よーし。我ら『おフロ研究会』もかなり規模を増してきたな。このまま行くと、全校生徒入会なんていうのも夢ではないかもしれん」

「そうですね、獏先輩。僕たちの快進撃は止まりませんよ」

「おお、立也君もそう思うかね。いざゆかん、我らの未来は止まらない！」

窓際から真っ青な空を指差しつつ語り合う二人には全くついていけないのだが、今日も『おフロ研究会』の部室では各々好き勝手に持ってきたゲームでなんとなく遊んでいる暇人たちの優雅な一時が流れているのだった。

「孝司、オセロやろうぜ」

「いや、ちょっと待ってくれ」

礼二からの誘いを右手で制してから、廊下では聞けなかった話題を少女にふってみる。

もちろん、少女にしか聞こえないくらいの小声で。

「百歩譲ってお前が夢を食べられるとしてもだな、いったいどうやって夢なんぞを食うんだ？」

「ん〜っとね、こんな風に——」

目の前に鶏の照り焼きがあるかのような仕草で、少女は大口を開いた。自然と大きな目も細まって、ちょっとした間抜けヅラになっている。

「ガァブツ、って食うの」

当たり前かのように言っているあたり、相当きているのだろうか。

そのまま無垢な瞳を浴びせてきたので、俺は何だか悪いことをしているような気分になってしまった。

と、そこへ、絶妙なタイミングで時音が割り込んできた。

「タカジイ、この子なんて言う名前なの？」

そう言えば名前を聞くのを忘れていた。俺が首をかしげていると、

「自己紹介します。あちしの名前は ^{おおぞら} 大空 ユメ。一年二組。よろしく」

目の前の少女はいたって普通の自己紹介をしていた。

「ユメちゃんかあ。かわいい名前だね。私の名前は——」

時音をかわきりに全員が自己紹介を終えたところで、

「あんちの名前はちかじって言うんだあ」

いやいや、違いますけど……。

「お前『た』って言えないのか？」

「言えるよ」

「じゃあ、言ってみろよ。た・か・じ」

「ち・か・じ」

「……絶対馬鹿にしてるだろ！」

「してない。ながみねちかじ、かあ～。呼びにくいなあ」

すると、

「自分が呼びやすいように呼べばいいのよ。私の場合はタカジイって呼んでるし」

時音がアドバイスを始めた。

「そっか」

ユメには何かがわかったらしい。

「ながみねちかじ、だから——」

誰か注意してやってくれよ。俺の名前はタカジだ。

「あっ！」

ユメは頭の上でランプが光ったかのように、ピンと人差し指を立てて、パアッと明るい表情で言い放った。この瞬間、俺の不名誉なあだ名がまた一つ増えることになったのである。

「チイでいいや」

「……………」

誰かつっこんでやってくれ。

「孝司、よかったな。チイだってよ。素敵なあだ名じゃないか」

ニヤニヤ笑っているあたり、この前俺が「エムジ」と言ったことに対する仕返しとでも思っているのだろう。

そのまま礼二は続けた。

「ユメちゃん。そのあだ名はどこから来たんだい？」

ユメはあっけらかんと言い放った。

「ちかじのチと、タカジイのイ」

もともとの名前の要素がゼロなんですけど……。しかも、『た』って発音できてるし。

「よかったね、タカジイ」

よかないよ。

「よかったな、チイ」

うるさいぞエムジ。

その後は落ち込む俺を尻目に、みんなで婆抜きをした。もちろん、雪女を除いて。ユメはトランプで遊んだことがないらしく、ごくシンプルなルールのもので採用した結果こうなったのだ。落ち込んでいる人間には勝利の女神すらそっぽを向いてしまうらしく、トランプ初体験のユメにまで負けてしまった。もっとも、婆抜きにそれほど経験値は必要ないんだけどな。

敗者の罰ゲームとして、俺はトランプの後片付けを命じられた。

全員がいそいそと帰宅していく中で、ユメだけが俺のことを不思議そうに眺めている。

「なんだよ？」

「チイ、なんであちしのことを覚えてるのだ？」

やっぱりこのあだ名は決定事項なのだろうか。

「夢に出てきたからだろうが」

「あの夢をおぼえてるのか？」

いかにも昨日の俺の夢を知っているかのような物言いだ。

「はっきりとは覚えてないけど、お前のことと、お前が言った「夢を食う」って言葉だけは覚えてる。正確に言うと、思い出したって言った方が正しいんだけどな」

「やっぱり、昨日のチイの夢をたべきれてなかったんだなあ」

「は？」

「だから、あちしが食べ切れなかったんだよ」

「何を？」

「チイの夢」

「……………」

トランプをきっちり揃えて、何回もよ〜く切った上で箱の中にしまうと、俺は立ち上がり、自分の鞆を手にした。そのままドアのところまで行き、

「ユメ、帰るぞ」

プウッとふくれっ面をしたユメはなんともかわいらしかった。

「チイは全然信じてくれないな」

「当たり前だろ」

「信じてもらえなくても全然不都合はないけど、なぜか腹が立つのは何でなんだ、チイ？」

「お前、『た』って普通に言えるんだな」

「当然だ」

「夢ってうまいのか？」

「信じてくれたのか？」

「まさか」

「うううう……」

廊下をピョコピョコ歩いていたユメが突然立ち止まり、俺の袖口を引っ張った。

「どうした？」

「なんだかムシャクシャする。どうしたら信じてくれるのだ？」

「ん～、そうだな～」

あれこれと考えが浮かぶというより、これしか浮かんでこなかった。

「今夜俺の夢の中に来い。そしたら信じてやるよ」

どんな誘い文句だよこりゃ。しかし、ユメは俺の顔を見上げたままコクリと頷いて、

「わかった」

そう言い残し、そのまま去って行った。

このとき俺は本当に信じてなどいなかった。夢を食うようなわけのわからん奴がこの世界にいるなんていうことを。ユメが俺の夢の中に再び現れるなんていうことを。

だがこの世界は、俺が思っているよりも数段柔軟にできていて、ユニークな現象で溢れかえっているのかもしれない。

やっぱり世界は広いみたいだ。

。

「まさか現れるわけないよな」と一人つぶやいてから布団にもぐりこんだ俺は、意外なほどあっさり夢の世界へと旅立っていた。

夢の世界に降り立った俺は新緑の大海原の上で一人ポツンと立っていた。ここが夢の世界だと気付いている時点でもうそれは始まっていたのかもしれない。真っ青な草原の上を駆け足で通り過ぎていく穏やかな風が、たなびく草花たちをおじぎさせている。

心地よい風に身をゆだねていると、

「おい、チイ」

水色の髪がフワフワ遊んでいた。

「これで信じてくれるのだな」

俺の顔も真っ青ですよ。

「マジかよ！」

俺がたじろいでいるのもまったくおかまいなしで、

「今日は昨日ほどチイの心は高揚してないな。これじゃあ、お腹ふくれないぞ」

小さな体で腕組みをして、文句を垂れている。

「お、お前、な、何でここにいるんだよ」

引き攣った声で聞いてみるのだが、

「チイが来いと言ったんだろ」

確かにそうですけど……。

「どうやって俺の夢の中に入ってきたんだ」

試しに頬をつねってみたが全然痛くない。つまり、ここは確実に夢の中なのだ。俺の夢なんだから、普通に考えれば俺の思ったとおりに事が運ぶはずである。というわけで、俺は心の中で「ユメよ消えろ！」と唱えてみたのだが、全く効果はないようだ。

「どうやってって言われても」

困ったようにユメは、タコ踊りのようなイカ踊りのようなわけのわからん動きをし始めた。

んで、最後には飛び込み台から飛び込むようなアクションをして、一連の踊りを完結させたらしい。

「っとまあ、こんな感じだ」

「どんな感じだよ！」

ユメは腰に手を当て、やりきったぞ！ みたいな誇らしげな表情で俺を見上げている。

「……………」

この場合、やっぱり俺はこいつが言った「夢、食うんだあ」という言葉を信じてやるべきなのだろうか。俺の夢に現れたら信じてやると言った手前、こいつの言動を信じてやるべきなんだろうが、一般的常識的判断というものが最後の一步までは踏み出させてくれない。

そんな俺の葛藤をよそに、

「チイ、あちし、他の夢を食いに行くから。バイバイするぞ」

そのままどこかに行ってしまうそうだったので、

「ちょっと待ってくれ！」

自分の葛藤に決着をつけるにはこれしかない。

「俺も他人の夢に連れて行ってくれ」

ユメの大きな両眼がパチクリと瞬いている。

「なんで？」

「まだこれだけじゃ納得できないからだ。凡人たる俺のキャパシティじゃ受け止められないことだってあるんだよ。百聞は一見にしかずだ。だから、俺も連れて行ってくれ」

「よくわからんが、もうちょっとで信じてくれるということか？」

「そういうことだ」

まだ信じてもらえていないということに対する不満を頬つぺたに詰め込んで、ユメは、わからずやだなあ、なんて事を呟いている。

「な？ いいだろ？ お願いだ」

俺の頼みに返事をするでもなく、ユメはピョコピョコと俺の前までやってきて、

「ほい」

右手を差し出した。

「なんだ？ 握手か？」

少しためらいながらもユメの手を握った。予想通りの小さな手と、思ったよりもやわらかい肌の感触に、握ったその手を恥ずかしがらせていると、

「目閉じて」

言葉通りに目を閉じると、やけに右手の感覚が冴えわたってしまい、

「絶対、目開いちゃダメだぞ」

幼いユメの声もやたらと艶っぽく聞こえてしまった。

そんな感触に浸っている暇もなく、

「うおオオオオ—————っ」

頭から何かに吸い込まれる感覚に襲われた。世にいう絶叫マシンとやらは大概平気な俺の精神力をもってしてもぐったりするくらい、疲労感満点の感覚だった。

数秒の放心状態を経て、

「目開けてもいいよ」

その声に目を開けてみると……………、豚が空を飛んでいた。

豚もおだてりゃ木に登るとか言うことわざは聞いたことあるが、空飛ぶ豚なんてのは聞いたことがない。スーパーマンもびっくりだなこりゃ。

周りをぐるりと見渡してみても、見たこともない風景に見たこともない人たちばかり。よく見りゃ全員金髪だ。ここがどこの国なのかもわかりゃしない。

「ワンダフルだな」

「チイ」

「なんだよ？」

「そんなに強く手を握るな。痛い」

知らないうちに右手に力が入っていた。恥ずかしさと申し訳なさで、つないだその手を放してしまう。

「す、すまん」

「うん」

ユメはそのまま前へ向き直ると、

「よし。あちし、今日はこの夢を食うことにする」

晴れやかな笑顔で宣言すると、

「ガァァァ—————」

昨日の光景そのままに大口を開けていたので、

「待ってくれ！」

ユメは大口を開いたまま俺の方に視線だけよこしてきた。

「今から夢を食うのか？」

首だけコクッと頷かせる。

「お前がこの夢を食ったら俺はどうなるんだ？」

「ひへふ」

「大口を閉じてからしゃべってくれるとありがたいんだが」

「消える」

「どういうことだ？」

「この夢中にはいられなくなる。だから、目が覚めちゃうか、そのまま自分の夢に戻って睡眠を続けるかのどっちかだ」

「お前はもうどうなるんだ」

「バイバイする」

園児を見送る保育士のように手を振っているので、

「一つ聞きたいことがある」

「なに？」

ユメが夢を食うということは仮説的想像力でこの際信じてやることにする。しかし、その事実を認めたとしてもまだ気になる点が残っている。

「お前はなんで夢を食べるんだ？」

どうやって食べるのかと尋ねたところでどうせまた、「ガァブツ、っと」なんて言うだろうから、夢を食う理由について聞いてみることにしたのだが。

「お腹すくから」

夢＝晩飯、かよ。

「夢はね、夢を見てる人がその日を幸せに過ごせれば過ごせただけ、おいしくてお腹もふくれるの。あちしはね、夢食べないとお腹がぐう～って鳴いちゃって、元気出なくなるの」

^{うれ}愁いの旅人のように虚空を見つめる少女は最後に告げた。

「でも、それだけじゃないんだけどね」

少女は今までとは明らかに違う声のトーンで言葉を紡いだ。晴れやかな夢の空が見事なまでのアンビバレンツを醸し出している。

「あちしは、『^{ゆめく}夢喰い^{びと}人』だから……」

そう言ってスッと瞳を閉じた少女は、再びそのまぶたを開き明るい笑顔を振りまいて、

「じゃあ、バイバイするよ」

スウッと空気を腹にため込み、

「いっただっきまーす！」

大口を開いて—————。

「……………ん？ ああ、夢か……。なんちゅう夢見てんだ俺は……」

またまた二度寝をしようとして、ふと時計を見やると……。

「遅刻する—————ッ！」

寝起きの俺は犬以下の学習能力しか持ち合わせていないようです、はい。

○

「—————なあ、孝司もそう思うだろ？」

「あ、悪いな。何の話してたっけ」

「お前ほんとにどうしちゃったんだよ。二日連続考え事か？また昨日の夢のこと考えてんのか？

」

弁当をつつきながら尾村が問いただしてきた。

「まあ、そんなところだ」

弁当箱の裏蓋にくっついてのご飯粒までも、箸で一つ一つ丁寧に取り除き、徹底的なクリンリネスを完遂させた立也までもがこの話題に乗ってきた。

「どんな夢を見たんだ？」

詳細を語ったって信じてくれるわけないので、

「空飛ぶ豚の夢だ」

適当に答えておいた。

「そうか。豚が空を飛んだら引き締まった肉質の豚肉が食べられなくなってしまうな。って、いかん、いかんぞ、それはいかん！ その豚を撃ち落とそう！」

おフロ研究会に入ってからこいつちょっとおかしくなっちゃったんじゃないか？

原因はハイってところだろう。

「斗真はどんな夢見たんだよ？」

尾村にふられた斗真は、あいかわらずの購買産焼きそばパンを頬張りながら、ダルソーに答えた。

「いちいち覚えてねーよ」

ま、そんなもんかもな。前日見た夢を忘れてるなんてことは多々あるわけで。

いや、待てよ。もしかしてこのような現象は全てユメによってもたらされているのだろうか。もしそうなのだとしたら、どんだけ食いしん坊なんだよあいつは。

「俺、ちょっと四組行ってくる」

数日前に礼二が、「この漫画マジ面白いから読んでみろよ。マジ、一回でいいから騙されたと思って読んでみろよ」と、マジマジうるさく迫ってきたもんだから、しょうがなくマジ騙されたと思って読んでみたところ、意外にも本当にマジ面白かった。

そんなわけで、予定返却日を二日ほど経過してしまったこの漫画を、そろそろ返してやらんといかんだらうということで、俺は昼休みの空き時間を利用して一年四組へと足を運ぶことにしたのだ。

「よお、礼二。漫画返しに来たぜ」

礼二に漫画を返すや否や、

「……………」

俺の関心は礼二の存在を飛び越えた。

「おーい、孝司〜。どうしたんだ〜？」

礼二の声なんてどこ吹く風だった。

俺は家族旅行でスキーに行ったことがあるのだが、今まさに、ここがあたかも早朝のゲレンデかのように錯覚してしまった。ゲレンデというものは真っ白な雪で一面覆われている。深々と降りつもる雪はすべての音を吸収してしまうのだ。それゆえ、凜とした空気が終わりのない琴線のようにどこまでも張り詰めている。

季節外れの感覚に浸りながらも、俺の焦点は窓際で一人静かに席につき、窓の外を眺めている少女に向けられていた。少女は、冬の空気のように澄んでいて、張り詰めた琴線のように危うく見えたから。この教室に雪は降っていないし、かける言葉も見つからないし、返ってくる言葉も期待できない。けれど、それでも、俺の目には彼女しか映っていなかった。

窓から入り込んでくる風に泳ぐ、淡く優しげなブラウンの髪に、言葉を奪われた。

半分しか覗けない、透き通るようにきめ細やかな少女の横顔に、視線を奪われた。

木漏れ日のような太陽の光を一身に浴びて輝く少女の存在そのものに、心を奪われた。

体に電気が走るようだ、なんて比喻を俺は信じたことがない。信じていないというよりも、自分には関係のないことだと決めつけていたのかもしれない。しかしこの瞬間、俺の体にはビリビリッと電気が走った。

これが恋なのかと問われれば、あいにく俺ははっきりした答えを返すことができない。なにせ、それぐらい曖昧な感覚だったし経験したことのない感覚だったからな。

運命というものを信じたがる人が世の中にはたくさんいるそうなのだが、はたして運命というものは本当に存在しているのだろうか。もし存在しているとしたなら、それは誰かが用意してくれた偶然なのだろうか。その誰かがこの世界を超越した神様とか言う存在だったなら――。

俺の視線を掴んで離さないこの少女の名前は、

—————ゆうなぎみその夕渚美園—————

俺はこの出会いを与えてくれた神様に感謝すべきなのだろうか。
それとも、恨むべきなのだろうか。

始まりの始まりを告げているのか、終わりの始まりを告げているのか。授業開始のチャイムの音が、いつも通りに鳴っていた。

○

新しく始まった環境にだんだんと疲れてきて、ああ～学校なんて行きたくねえ～、なんて思っ
てき始めるのが五月病というやつだ。今はまさにその五月であり、教室の中には「俺、五月病
だ～」なんて言いながらも、毎日ちゃんと学校に来ているやつらで溢れ返っている。

そんな五月病とはなぜだか無縁なこの俺も、部室に行くのだけは何か面倒になりつつあった
。その理由は五月病とは全く正反対で、例えてみるならオセロの裏と表だ。

ごめん、わかりにくいな。

要するに、毎日足を運んでいるせいで新鮮味がなくなってきたのだ。慣れ過ぎってのもよくな
いらしい。

それでもなぜだか俺の足が自然と部室に向かっているのは、毎日の習慣の賜物でもあるわけで
、人間なにかと矛盾しているように感じるのは俺だけだろうか。

そんなどーでもいいような思案にふけりつつ廊下を歩いていると、

「よう、孝司」

礼二と遭遇した。

「昼休みのお前おかしかったな。アホ面さげてポーっと突っ立ってんだもんな。あんな間抜け面
なかなかできないぜ」

これでもかっ！というくらい礼二は笑い転げていた。

「あの時お前何考えてたんだよ？」

背中をバンバン叩いてくるので、「痛てえな」なんて言いつつ礼二の手を静止させ、ちょっと
だけ真面目な顔を作って聞いてみた。

「お前のクラスにいたあの窓際の女子、なんて言う名前なんだ？」

俺が演出して見せた真剣な声色というのは全く効果がないらしく、礼二はいつものような軽い
感じで俺の質問に答えていた。

「どの女の子だよ？」

「窓際で静かに座ってたあの」

「窓際の女子は三人とも静かだからわかんねえよ」

「わかるだろ。あのサラサラヘアーの女の子だよ」

「三人ともサラサラだぜ」

ダメだこりゃ。と諦めかけていると、

「もしかして、あんな感じの子か？」

そう言って礼二は前方を指差した。

『おフロ研究会』と書かれてだらしなくぶら下がっているかまぼこ板の前に二人の少女が立っていた。一人は礼二と同じクラスの長沢だ。

そして、礼二の指先は長沢ではなく、彼女の友達であろうもう一人の女子に向けられていた。

「そうそう。あんな感じの……」

何気なく頷いてから俺は気付いた。

「礼二！ あの子だよ！」

取り乱してしまった俺は、思わず大声を出していたので、長沢だけでなく少女もビクッと体を飛びあがらせて、俺たちの方を見ている。

「あっ、長滝さんと永峰くん、こんにちは」

長沢は律儀にも礼二と俺に向かってお辞儀をしてくれた。

「あ、あ、あのう」

もう一人の少女は追い詰められた子猫のように一通りあたふたした後、

「こ、こ、こ、こんにちは」

淡い茶色の髪を勢いよく揺らしながら、こちらもまたご丁寧にあいさつをしてくれた。

「こ、こんにちは」

「よう。ホームルームぶり」

思わぬ形で俺はこの少女とのコンタクトを果たしたのだった。

。

「一年四組、夕渚美園です。よろしくをお願いします」

少女は、今度は研究会のメンバー全員に向かってあいさつをしていた。

「うむ。誇らしいことだ。我ら『おフロ研究会』は、もはや飛ぶ鳥を落とす勢いにある。このまま行けば、部活として申請できるやもしれん。みなのもの、天下統一の日は近いぞ！」

なんちゅう大げさな人なんだこの先輩は。

「獏先輩！ 部活昇進の暁にはみんなで焼き豚パーティーをしましょう！ 幹事は僕がやらせていただきます！」

豚限定かよ……。

俺は、ハイや立也のように脳みそを突き破るようなマックステンションにはならなかったも

の、かなり心躍る気持ちでいた。なにせ、これぞ青春！　と言ってもいいくらいの衝動を頭から浴びせられ、その余韻に浸ったまま、世界一周旅行を成功させた熱気球並に大きな妄想を膨らませるといった、健全な男子なら当然行きつくであろうルーティンワークを一通りこなす前に、その原因たる少女の名前を知り、今こうして会話が成立しているのである。

「俺は一年七組、永峰孝司って言います。よろしく」

「よろしくです」

いちいちお辞儀を返してくれるあたり、もう、たまりません。

しかしまあ、こんないい感じの余韻に長々と浸らせてくれないのがこの部活の日常でもありまして。

「タカジイの名前はね、呼びにくいから何か呼びやすいあだ名を考えて、そっちの方で呼んだ方がいいわよ」

俺の名前のどの辺が呼びにくいのか説明してほしいもんだね。

「あちしも、チイって呼んでるよ」

あたかもみんな俺をあだ名で呼んでいるかのような言い方はやめてくれ。わけのわからんあだ名を使っているのはお前らぐらいなもんだ。

「そうですかあ」

「そうよ」

「そうそう」

頼む〜誰か止めてくれ〜。なんて心のうちで叫んでみたところで誰かが止めてくれるはずもないので、自ら悪の陰謀を阻止しようと試みたのだが、

「う〜ん、えーっと、……。あつ、ああ……でもなあ〜」

俺のあだ名を決めかねて悩んでいる様子が天使のように可愛らしかったので、つつい見とれてしまった。

俺が小悪魔二人の陰謀阻止をためらっていると、

「うん。決まりました」

決まってしまった。

「私、永峰くんのこと、ユウユウって呼びます」

天使の笑顔はそりゃあもう極上スイーツなわけですが。

「何でその呼び方なんだよ！」

緊張というかドキドキというか、そういう類たぐいのものがきれいさっぱり飛んでいった。

「だって、呼びやすいあだ名でいって言ったから」

「俺の名前のどこを探せばユウユウってあだ名になるんだ」

「それは……」

天使のうるんだ瞳に見つめられた俺は、一瞬ドキッとしてしまったのだが、

「私の小学校の頃のあだ名です」

「……………」

ふざけてるように聞こえたかもしれないが、実際に目の前でこいつの表情を見ている俺の口から言わせてもらおうと、夕渚美園は本気だった。真面目に考えて考え抜いた結果が、「ユウユウ」だったのだ。

「お前、天然か？」

「私、全然天然じゃないです」

えてして本物の天然というものは、自分が天然だということにミジンコ程も気付いてない奴らのことを言うのであって、そういう判断基準を持ち出せば、こいつは間違いなく天然と呼べる部類の人間だった。

「やったね、タカジイ」

「よかったな、チイ」

全然よかないよ。この部室の中で俺のことを普通に呼んでくれる女子は長沢だけになってしまった。

あ、雪女もいたんだっけ。

この後はいつものごとくやかましく遊び呆けていたわけだが、部活終了の時間まであと十五分というところで、夕渚への歓迎の意もかねて、もはや恒例になりつつある全員参加の婆抜き大会をした。

全員と言っても若干一名は周りの空気もどこ吹く風と言った様子で、涼しい顔して本を読みふけているわけだが、これがここの部室での日常風景であって、彼女が夕渚を歓迎していないという意味ではないので、そこんところを決して誤解しないように、俺と長沢で夕渚によ〜く言って聞かせておいた。

ところで婆抜きの結果はどうだったかと言え、なぜだかまたしても俺がドベだった。俺の知らないうちにみんなしてババに目印とか傷をつけてるんじゃないかと思って、一人片付けている最中に注意深くババのカードを見つめていたのだが、目印やら傷といったものは全く発見されなかった。単純に俺が勝利の女神に嫌われてるだけってことみたいだ。

日頃の行いはそんなに悪くないと思うんだがな。

「はあ」なんてため息をつきつつ廊下に出てみると、ユメが一人で待っていてくれた。

「あちしの言ってること信じてくれたよね？」

わざわざその確認のために待っていたらしい。

「まあな。信じるしかないだろ。本当に夢の中に現れたんだから」

俺の言葉を聞き終わると、ユメは嬉しそうににんまりと笑って下駄箱の方にぴよこぴよこ走り去ってしまった。

しかし、ユメが廊下の角を曲がるや否や、

「痛って！」

「あいちちち」

という二つの声が聞こえてきた。慌てて俺が駆け寄ると、

「おお。孝司」

痛そうに腹のあたりをさすりながら、斗真が立っていた。

「大丈夫か？」

両者を見比べた結果、ユメの身長の高さもあいまって、ユメの頭がちょうど斗真のみぞおち辺りに入ったらしく、二人の体格差とは反比例するように斗真の方が重傷だった。

「何とかな」

顔を歪ませているあたり、相当痛いらしい。

どうやら斗真は教室に忘れ物か何かを取りに行くらしく、鞆などは持っていない。

「ユメも大丈夫か？」

額をこすっているユメにも気を遣ってやるのだが、

「あちしはだいじょおぶだよ」

ケロッとした顔で返してきた。

「なんだ、孝司の知り合いか。ぶつかって悪かったな」

「だいじょおぶだから気にするな。あちしも悪かった」

斗真はそのまま教室の方に行こうとしたのだが、一度俺たちの横を通り過ぎてから、機関車がバックするような感じで再び俺たちの前に現れた。

「孝司、そのチビッ子はお前の彼女かなんかか？」

確かに放課後の校舎を男女二人で歩いていたらそう見えなくもないわけで。

「違う。こいつは部活が同じなんだよ。部活って言っても研究会だけだな」

「あの『おフロ研究会』とか言うやつか」

「その通り。でもって、こいつは一年二組の大空ユメ」

「はじめまして」

ユメはペコリとお辞儀をした。

「俺は孝司と同じクラスの栗木斗真。よろしくな」

斗真という名前に反応したユメは、

「チイ、こいつが斗真か。立也と話してるとよく名前が出てくる奴だな。本物は初めて見たぞ」

天然記念物を見ているかのような目で斗真を見ていた。

しかし、斗真も俺の方に奇妙なまなざしを送っている。

「お前、チイって呼ばれてるのか？」

やっぱりそこか……。

「ま、まあな」

「ご愁傷様」

「お、おう」

斗真は俺を憐みのまなざしで一瞥した後、ユメが切り出した話題に乗っていた。

「そう言えば立也も『おフロ研究会』だっけか？ もの好きだねえ、あいつも」

斗真は薄らと笑っていた。斗真にしては珍しい表情のように思う。

せっかく立也の名前が出たので、最近の立也の部室でのおかしな言動なんかを話してやった。めずらしく食い付きのいい斗真に、俺の方もなんだか夢中になってしまい、気分がよくなってきたところで思わずユメの話までしてしまった。

「こいつ、夢食うんだってよ」

幸い、斗真は全く信じる様子もなくおどけた感じで、

「グルメなんだな」

なんて返してきた。

「あちしは本当に夢食うんだぞ！」

と、いつかの様子そのままにユメはプンプン怒っていたが、俺にとっては、その帰り際にふと漏らした斗真の言葉の方がなんだか印象的だった。

夕日に赤らんだ廊下のどこを見るでもなく、自分の瞳を覗きこんでいるかのようなぼんやりとした目でつぶやいた一言が。

「あんま思い出したくない過去ってやつも、食ってくれる奴がいたらいいんだけどな」

初めて見る、斗真の悲しそうな顔だった。

○

夕渚と出会って尚且つ自然な感じで会話までしたせいだろうか、俺はお花畑の中にいた。

いきなりの「ユウユウ」発言に、当初は俺の眼球にかかっていたほんわか青春フィルターもはがれ落ちてしまったわけだが、そんなフィルターが無くとも夕渚は十分に可愛らしかった。

ところで、どうして俺がこんなお花畑のど真ん中にいるかと言うと、お花摘みに来たわけでも押し花をしに来たわけでもない。もちろん、「好き」「嫌い」「好き」「嫌い」なんて言いながら花びらをチラチラ散らしに来たわけでもない。

何を隠そう、ここは俺の夢の中なのだ。

ちょっと一目惚れっぽい体験をしたからって、そこからお花畑に結び付けてしまう自分の脳みそに若干の恥ずかしさを覚えながらも、ここが夢の中だと気付いてしまった自分に、「何やってんだよ！」と喝の一つや二つ入れてやりたい気分になっていた。

「どこにいるんだ？」

おそらく現れるであろう一人の少女を探していると、

「よお、チイ。ここにいるぞ」

俺の真後ろから現れた。まったく、影法師かよお前は。

「チイ、一言言っていていいか？」

「どうぞ」

ユメは周りの景色をぐるりと見渡してから言い放った。

「メルヘンチックだな」

「……………」

お恥ずかしい。返す言葉もございません。

そのままユメは俺の方に向き直ると、俺の顔を見上げて笑顔で宣言した。

「今日はチイの夢食うぞ」

どうやら今日の俺は夕渚と出会ったせいで、なかなか弾んだ心持だったらしく、ユメにとってはお腹のふくれるいい夢だったらしい。

しかし、夢を食われたところで何の実害もないと分かっているものの、実際に食べられるとなるとなんだか嫌な気分になる。というわけで、俺の思考回路決議によって、ユメの夢食い宣言は否決されることになった。

「やめてくれ。別の人の夢にしろ」

「何でだ？」

「何でもだよ」

「嫌だ。食う」

母親に好きなおもちゃを買ってもらえない三歳児のようなわがままっぷりをいかんなく発揮してくれちゃってるもんだから、俺はもうお手上げだよ。ヘルプミーだよ。

でもここで折れてしまったら、今後もこいつのいいカモになりかねないので、「頼むからやめてくれ」と粘り強く根気強く説得していると、

「それじゃあ、おいしい夢を見てそうなやつを紹介しろ」

という妥協案を掲示してくれた。

今日の俺並に心躍っていきそうなやつは全く浮かんでこなかったのだが、今日を幸せそうに過ごしていた奴を頭の中で懸命に探していたその反動だろうか。今日の別れ際に気になることを言っていた一人の男子生徒が浮かんできた。

「斗真なんてどうだ？」

たぶん、ユメに言わせるところの「おいしい夢」なんてのは程遠い夢を見ていそうだったが、俺にとってはすごく気になる夢だったので斗真の名前を挙げてみた。もちろん俺は、俺もユメと一緒に他人の夢にお邪魔させてもらうこと前提で話していた。

「斗真か。まあいいだろう」

案の定一人でどこかに行ってしまうそうだったので、

「待て、ユメ。俺も連れてってくれ」

嫌がるかと思ったのだが、

「ほい」

右手を差し出して、指先でカモンカモンをしていた。

「じゃあ、行くぞ。チイ、手を放すなよ」

この言葉を合図にしたかのように俺は再び、「天王星発土星行き特別超快速」とかいう感じの、心臓弱い人じゃなくても乗っちゃだめでしょ！ と叫びたくなるような感覚に襲われつつ、斗真の夢へと降り立った。

斗真はかなり日常的な夢を見ていた。

「ここ、納陵高校だよな」

周りを見渡しながらかユメの同意を待っていると、

「チイ」

ユメはハムスターもびっくりなくらいの膨れっ面をして、

「全然おいしそうな夢じゃないぞ」

予想通りのクレームだった。

「まあまあ、そんなに文句ばかり言うなよ。とりあえず、斗真を探そう」

と言ってから、ふと気になることが。

「俺やお前がこの夢の中で斗真に会ったらやっぱまずいのか？」

常識的な人間にとっては到底理解しがたい異常行動を俺とユメはとっているのである。何かやばいことをしている気分になるのは当然のことだ。

「心配ない。ここはあくまで夢の中だ。斗真にしてみれば、夢の中にあちしやチイが出てきたと思う程度のことだ。それに、あちしやチイがもし変なことをしたり言ったりしても、あちしがこの夢を食べば斗真の記憶には残らない」

「ということは、特に心配するようなルールみたいなもんはないってことだな」

「でもここは他人の夢の中だ。当然、あちしたちは夢の中で重要なファクターじゃないから、あちしたちの存在は無視されやすくなる。そのことだけはよく覚えておけ」

「わかった」

そして、俺とユメは校門をくぐった。

とりあえず手始めに一年七組の教室に行き、その後校舎の中を歩き回ったのだが斗真の姿を見つけることはできなかった。というか、斗真の姿だけでなく人っ子一人出会うことはなかった。校舎の中も細部まで再現してあるわけではなく、特に南館においては色彩や構造なんかがかなり簡易化されて存在していた。これはたぶん斗真が南館にあまり足を運ばないせいなのだ

ろう。運動系の部活に入っている奴らの部室はグラウンドにあるから、南館を訪れる頻度は極端に少ないのだ。見たこと聞いたこともないようなものを構築できるほど夢の世界ってのは万能ではないらしい。

どうやら斗真は校舎の中にいないようなので、俺とユメはグラウンドに行ってみることにした。

「チイ、いたぞ」

俺より先にユメが斗真を発見した。

「おお、部活か」

俺は斗真が真面目に汗を流している姿を初めて見た。体育の授業のときはダラダラ歩いているか、保健室で寝ているかのどちらかの印象しかなかったので、これは新鮮な光景だった。もしかしたら、選択種目であるバスケの時間もこれくらい頑張っているのかもしれないが、残念なことに俺の選択種目はソフトボールなので詳しくはわからない。

まだ入部したてなのでレギュラーでも何でも無いんだらうけど、ただひたすらにボールを追いかけている斗真の姿は、普段とは全く違う、純粋な少年の一面を表しているような気がして、自然と見入ってしまった。斗真の額から流れ落ちているキラキラ光る汗が、普段のとげとげしさのようなものを洗い流しているのかもしれない。

「チイ」

なんだか興奮した様子ユメが激しく俺の裾を引っ張っている。

「かっこいいぞ。斗真、かっこいいぞ」

ユメもこの光景に見入っているようだ。もはや、夢がおいしいのおいしくないだのという話はきれいさっぱり忘れてしまっているらしい。

「チイ、お前は何かスポーツをやってないのか？」

「あいにく俺はわけのわからん研究会に入っちゃったからな。掛け持ちする気にはならん」

「そうか。あちしが思うに、男は全員スポーツをやるべきだ。髪型気にしてる暇があったらスポーツをやった方がいい。その方がかっこいい」

「悪かったな、スポーツやってなくて」

「気にするな。これはあくまであちし個人の見解だ」

ユメが鼻息三割増でスポーツに汗を流す男の美しさを語っているうちに、部活が終わったのか、斗真がこっちに向かって歩いてきた。

「お疲れ」

「ナイツシューだ」

俺とユメが話しかけると、

「サンキュ」

と言ってそのまま部室の方へと消えていってしまった。

「何かそっけないな」

「だから言った。こんなもんだ」

まあでもよくよく考えてみると、現実の世界でも斗真の対応はこんなもんかもしれないな、なんてことを思いつつ、おそらく戻ってこないであろう斗真を待っていたのだが、当然のごとく斗真は戻ってこなかった。

「どこ行ったんだろうな」なんて言いながらユメとグラウンドやら校舎やらをグルグル回ったのだが、人の気配というものが全く無くなっていた。

学校の敷地内に斗真はいないと判断した俺たちは、外に出ようと校門をくぐったのだが、
「なんじゃこりゃ？」

「これが夢だ」

一歩敷地外を踏んだ時には、景色が全く変わっていた。俗にいうワープみたいな感じかな。
「この世界の主体は斗真だからな。こういうことは当たり前起こるのだ」

ユメは理屈っぽく説明することなく、さも当たり前かのように教えてくれた。

「ここはどこだ？」

室内だということはわかるのだが、薄暗くてよく分からない。床には湿っぽい畳が敷いてあり、古臭い筆筒の匂いが木目調を連想させる。ここはたぶん民家だろう。

「チィ、何か聞こえる」

ひそひそ声で俺に話しかけたユメの近くに行ってみると、おそらく喧嘩をしているのであろう男女の声が聞こえてきた。

「夕飯作ってないくらいでいちいち文句言わないで」

凜とした女性の声に、

「何だその言い方は！ こっちは仕事でくたくたなんだぞ！」

野犬のような男の悲鳴。

「あなただけじゃないでしょ。私だって働いているのよ」

「だからその言い方はなんだって言ってるんだ！」

襖越しだからよく分からないが、たぶん、女の方は男の人にぶたれたのだと思う。

「何でそうやってすぐに手を挙げるのよ！」

ガチャン、という悲鳴が静かに落ちていった。食器か何かが割れたのだろう。

「誰のおかげで飯食っていけてると思ってんだ！」

ヒステリックな男の怒号に、女の方は泣いていた。

「あなただけが稼いでいるなんて思わないで！」

勇ましく透き通った声が男の怒号に沁み込んでいく。

「何が言いたいんだ」

さっきまでの威勢が一転、ひどく腹の底にまとわりつくような男の声が空気を黙らせた。襖

の奥からは女の人が鼻をすする音だけが漏れ聞こえてくる。

「何が言いたいんだって聞いてんだよ！」

部屋が揺れた。

「俺より稼ぎがいいからって偉そうにしてんじゃねえぞ」

家が沈みそうな恐怖心。

「やめて！ お願いだからやめて！ きゃあ！ ごめんなさい。ごめんなさい。お願いだから。お願いだから許して下さい」

この後は女の人の鳴き声しか聞こえてこなかった。

俺はここが誰の家なのかということくらい想像がついている。だから俺は気になったんだ。あいつはこの襖の向こうにいるのだろうか、何を見ているのだろうか、どんな表情でやり過ごしているのだろうか。考えれば考えただけやり切れない思いが込み上げてくる。喧嘩をしている二人の大人と、どこかにいるのであろう一人の少年。その関係が俺の思っているものと違っているのなら、それはそれでいい。いや、むしろその方がいい。

俺は人の夢がその人の過去をそのままを反映していると考えているわけではない。俺自身、意味不明な夢を見ることだってあるのだから。でも、だからと言って、夢が全て虚構でできている、という風に言うこともできないでいる。少なくとも俺の経験からはそう言えてしまうから。

明日からの俺は、斗真と上手く接することができるだろうか。今までと変わらない態度であいつと会話ができるだろうか。はっきり言って、わからない。

気付けばユメが俺の服の裾を握りしめていた。こんな修羅場的シチュエーションに初めて出くわしたのだろう。小さくなって震えている少女の両耳をふさいでやった俺は、できればこんな夢とは出会いたくなかったな、なんて事を思いながら、好奇心で夢を覗いてしまった浅はかな自分の行いに反省していた。

俺とユメが襖に背を向けると、

「あっ」

襖のわずかな隙間からこぼれ出た蛍光灯の明かりが、俺たちの視線を導いてくれた。

白い光の先で、幼い少年が膝を抱えてうずくまっている。

耳をふさがれていたユメは気付かなかったかも知れない。少年は、襖から染み出てくる声に隠れるようにして苦しんでいたから、気付けなかったのかもしれない。部屋の隅に溶けていく少年が震えていることに。

そのまま俺たちは、少年の濡れた瞳へと吸い込まれていった。

深く深く、底のない瞳の奥へと。

「あれ？」

天井が高い。

というか、空が高い。

つまりは外だ。

気付けばまたもや場面が変わっていた。俺の眼前には見たことのない風景が広がっていた。

「たぶん斗真の地元だろう」

そう言うとユメはピョコピョコ歩きだした。場面の転換とともに気持ちの切り替えまでできてしまっているユメに、俺はほんの少しだけ感心してしまった。女の子が失恋を引きずらないというのは案外本当なのかもしれないな。

そんな事を考えながら数分歩いていると、中学生であろう人の流れを発見することができた。日の暮れ具合からして今はちょうど下校時間なのだろう。よく見ると中学生の団体の中には高校で見かけたことのあるような顔ぶれも混じっていた。

「これってもしかして」

ユメの顔を見やると、

「うん。これは斗真が中学生の頃の世界なのだろう」

こう言う場面に遭遇すると、「ああ、俺、こんな体験してて大丈夫なんだろうか」なんて不安に襲われたりもするのだが、ユメに言わせると、「経験豊富な大人になれるぞ」だそうだから、まあいっか、と将来の心配をすることを中断するのであった。

俺たちは見知らぬ土地を二人で歩き回っていたのだが、いっこうに斗真を見つけることができなかった。その代り、導かれるようにして人気の薄い公園にたどり着いた。

ためらうでもなくズカズカと公園の中に入っていくと、

「あ、いた」

ただでさえ人気の薄い公園であるのに、それをさらに二乗したくらい人気の薄い場所に斗真はいた。斗真がいる場所は大きな遊具の陰になっているので、通りから一瞥するだけでは見つけられないのだ。

しかし斗真の方は俺たちの存在に気付くことなく相変わらずのトゲトゲオーラを放っていた。

公園の中をもう少し歩いて行き、「斗真」と声をかけようとした寸前、俺はあることに気がついた。

「あいつ……」

斗真は同じ制服を着たガラの悪い連中四人に囲まれていた。ガラの悪い連中が何人も集まって「か〜ごめかごめ〜」なんて歌を歌ってるわけないから、状況的にはよろしくない方向に向かっているのだろう。

「チイ」

いまにも駆け出しそうな俺をなだめるべく、ユメの右手が俺の肩をポンポン叩いていた。

「これは斗真の夢の中だから心配するな」

さっきまで震えていたくせによく言うよと思ったが、まあ、確かにユメの言う通りだなと自

分に言い聞かせつつ、俺はあることに思いを巡らせた。

(あんま思い出したくない過去ってやつも、食ってくれる奴がいたらいいんだけどな)

あの時見た斗真の悲しげな表情を思い出しながら、俺はユメと二人で遊具の陰から事の成り行きを見守ることにした。今日は斗真の全部を見ているような気分だ。明日絶対謝ろう。

「お前マジ調子乗りすぎなんだけど。何回シメられれば気が済むわけ？」

調子に乗ってんのはお前だろ、と教えてやりたくなくらい態度のでかい男が斗真を押し倒した。態度だけじゃなく体格まででかいこの男は倒れ込んだ斗真に向かって唾を吐きかけている。

斗真も斗真で、お前が吐き掛けた唾はこんなにも醜いんだぜと言わんばかりの目つきで、かけられた唾を拭いもせずぬらりと頬に垂らしている。

「こいつぜってーMだぜ。ひっひっひ。実は嬉しいんだろ？」

サディズムに目覚めてしまったらしい別の男が斗真の腹の辺りに蹴りを入れ始めた。これはさすがに効いたらしく、斗真は腹を押さえてごほごほ咳き込んでいる。

「キモすぎなんですけどー。ワンって言って見やがれこのクズ！」

いったい何に対して気持ち悪いという言葉をつきかけているのか知らないが、今度は少し小柄ないじめっ子が斗真の顔面を踏みつけていた。お前の靴についた誰かさんの唾の方がよっぽど気持ち悪いように思うのだが、何となくの雰囲気だけで言葉を吐きかけているこいつらはそんなことには気付いていないようだ。

「おいおい、顔はやべーって。外からバレないところにしねーと。こことか。マジ超ウケる」

まともに喧嘩したら小六にも負けるんじゃないかっていうくらいへちま男も斗真の太腿を蹴りつけていた。

俺も結構やばめなシチュエーションを想定していたのだが、その予想をはるかに上回る悲惨な状況だった。夢の中なので多少塗色もされているかもしれないが、その分を差し引いたとしても見るに堪えない光景だ。まさにボッコボコである。顔だけ綺麗な状態に保っておくあたり、こいつらの陰湿さが十分にみてとれる。

斗真は決して軟弱な人間ではないから少しぐらいやり返せばいいものを、歯を食いしばったまま一切の抵抗を見せなかった。無抵抗なものを痛めつけるという絶対的な優位に酔いしれてしまっているのか、狂気の傀儡と化した四人はリミットの籐たがが外れたかのように永遠斗真をなぶり続けている。

さすがにこの状況では、夢の中の出来事と分かっているにもかかわらず我慢することができなかった。さっきまでの室内での出来事とはわけがちがう。やられているのは斗真自身なのだから。だから当然、「やめろこの野郎！」と突進していきたい気分になった。ユメもこの状況はさすがに見かねたらしく、「あちしも行く」と言ってきた。

俺とユメがお互いのアイコンタクトだけで合図を送り合い、行くぞ！と腹を決めたちょうどその時、

「何してるんだ！」

俺たちのものではない怒号が割って入った。

そいつはこういう不健康な場面には最も似つかわしくない奴だった。

「なんだてめえ、やんのかコラ！」

お前らそれしか言えないのかよ！とツッコミを入れたくなるくらい定番なセリフを吐き散らかして、ガラの悪い四人組は勇敢に現れた少年へと歩み寄っていく。

少年は四人組の迫力に押されたのか、二、三步たじろいだが、何かを決意したかのようにぶるっと首を振ると、一直線に連中めがけて突っ込んでいった。

四人組は一瞬歩を止めたが、自分たちの多勢を確認すると再びニヤつきながら前進していく。

俺とユメが、少年の勇敢さに見とれていると、

「あれ？」

少年は連中を見事にスルーして斗真のもとへと駆け寄っていった。

「逃げるぞ、斗真」

喧嘩する気はさらさらないらしい。

「無理。マジ無理。超痛てえ」

少年が斗真を抱えているうちに、

「ちょっと一、無視しないでくださーい」

二人まとめてポッコポッコにされてしまった。

きっと斗真はあの性格上、中学の中でもちょっと浮いた存在になっていたのだろう。そのつんけんした態度がこういう不良っぽいやつらの癪に障って、ちょくちょくこういう目にあっていたんだと思う。そう考えると、そんな斗真を性格上放っておけないこの少年が、かわいそうではあるものの、なんだか間抜けにすら思えてくるのだからおもしろい。

でも、なんだかわかった気がした。

どうして性格真反対のあの二人があんなにも仲良くやっているのか。決して言葉数は多くないのだけれど、お互いがお互いを信頼しきっているような関係でいられるのかが。

「斗真、すまん。僕もやられてしまった」

「マジ役立たず」

「斗真、前から思っていたんだが、お前にはもっと協調性というものが必要だ」

「うるせえよ」

「まったく、お前といるとろくなことにならん」

「じゃあ来んなよ」

「それはできん。なぜなら僕は」

お互いの背中に身を寄せながら、お互いの性格を表したかのように全く別々の景色を眺めながら、二人は言葉をかわしていた。きっとこの少年も斗真の全てを知っているわけではないの

だろう。話たくないことというのは誰に限らず持っているものなのだろうから。でも、そんなこと知っていなくたって、地球は毎日回っているんだ。

「斗真、お前の友達だからな」

斗真はふっと硬い表情を崩した。

「よくそんな臭いこと言えるよな」

「事実を述べているまでだ」

「マジ勘弁」

バサッとお互いの背中を滑るようにして大の字になり、二人は寝転んだまま天を仰いでいた。

「でもよ」

このときの斗真の表情を俺たちは覗くことができなかった。もしかしたら、俺たちがまだ見たことのない満面の笑みを浮かべていたのかもしれない。

二人の会話を邪魔しないようにしているのかと思うほどに黙り込んだ公園の空気の中で、斗真の声がはっきりと震えた。

「ありがとな、立也」

空から見つめる太陽もこの二人に遠慮したのだろうか。申し訳なさそうにその後姿だけをのぞかせている。一口には言い表せないほど様々に味わいのある赤色を引連れて、空がその頬を染めていた。

これほどまでにきれいな夕焼けを見たことがない。

俺は気象予報士ではないけれど、絶対の自信を持ってこのことを宣言できる。

明日はきっと、晴れるだろう。

○

「私ね、思うの」

何を？

「世の中の男はみんなモジモジくんだと思うのよ」

な、な、な、何ですと！

「どうして世の中の男はみんなここ一番って時にはっきりとものを言えないの？特に恋愛におけるそういう場面では深刻な問題だと思うのよ」

みんながみんなそんなふうではないと思いますが.....。

俺は、時音、長沢、夕渚、ユメの一年女子メンバーが部室の席を囲んで何やらおしゃべりしているところを盗み聞きしていた。と言っても、盗んでまで聞きたいのは夕渚か長沢のトーク内容ぐらいなもので、あとの雑音は自然と耳に入ってくると言った方が正しいだろう。

「私はね、はっきりしない男のそういう態度も嫌いだけど」

何故だか興奮状態にある時音は窓の外の空を眺めて、

「こういうはっきりしない天気も大っ嫌いなのよ」

……。はい、今日は晴れませんでした。見事なまでの曇り空です。

「まあ天気のことはいいとして、このことについて瑠璃ちゃんはどう思うわけ？」

無駄に喧嘩腰の時音に突然ふられた長沢は、小動物のように体をビクッと強張らせたが、落ち着きを取り戻すと、時音をなだめるように優しく発言した。

「でも、時音さんが言ってるのは昨日のドラマの中の人の話でしょ？あそこではっきり「好きだ」って言っちゃったら、まだ五話なのに話し終わっちゃうよ」

ドラマの話かよ！

「確かにそうだけど、あの話に共感できるってことは、みんな似たような経験をしたことがあるってことでしょ？やっぱり男はモジモジくんだと思うのよ」

時音は昨日のドラマの進行がかなり気に食わなかったらしい。俺は今話題に上っているドラマは一話で飽きちまったから、昨日の放送なんて見ているはずもなく、やっぱり大したドラマじゃなかったんだと、自分の判断力の賢明さに感心しているのであった。

俺が一人で「うんうん」と頷いていると、

「時音さん、男はモジモジくんなんかじゃないわ」

やけ～に冷たい声が舞台に上がってきた。

「いいこと、みなさん」

主演女優の座をさらりと奪い取った雪女は、従者に言いつけごとをする女王様のような気品を振りまいて、

「男はね」

もったいぶるように四人の顔を見渡してから、

「エロスなのよ」

だからあんたがエロスです！

それだけ言い終わると、満足したのか、いつものように部室の隅っこに行き、本を読みはじめてしまった。やっぱりこの先輩は読めないな。

「な、な、な、なんじゃこりゃあああ～」

ここにも読めない先輩が一人。

「先輩、弱すぎですよ」

どうやらハイは礼二とオセロをやっていたようだ。その勝敗を確かめるべくオセロ盤をのぞきこんだ俺はあり得ない光景を見た。

「猿先輩、これは歴史的な大敗ですよ」

昨日の夢の中で勇敢にぶちのめされていた少年も興奮した声を上げていた。

オセロ盤の上はほとんど真っ黒と言っていい状態だった。辱めを受けているかのようにポツ

何故だか興奮状態にある時音は窓の外の空を眺めて、

「こういうはっきりしない天気も大っ嫌いなのよ」

……。はい、今日は晴れませんでした。見事なまでの曇り空です。

「まあ天気のことはいいとして、このことについて瑠璃ちゃんはどう思うわけ？」

無駄に喧嘩腰の時音に突然ふられた長沢は、小動物のように体をビクッと強張らせたが、落ち着きを取り戻すと、時音をなだめるように優しく発言した。

「でも、時音さんが言ってるのは昨日のドラマの中の人の話でしょ？あそこではっきり「好きだ」って言っちゃったら、まだ五話なのに話し終わっちゃうよ」

ドラマの話かよ！

「確かにそうだけど、あの話に共感できるってことは、みんな似たような経験をしたことがあるってことでしょ？やっぱり男はモジモジくんだと思うのよ」

時音は昨日のドラマの進行がかなり気に食わなかったらしい。俺は今話題に上っているドラマは一話で飽きちまったから、昨日の放送なんて見ているはずもなく、やっぱり大したドラマじゃなかったんだと、自分の判断力の賢明さに感心しているのであった。

俺が一人で「うんうん」と頷いていると、

「時音さん、男はモジモジくんなんかじゃないわ」

やけ～に冷たい声が舞台に上がってきた。

「いいこと、みなさん」

主演女優の座をさらりと奪い取った雪女は、従者に言いつけごとをする女王様のような気品を振りまいて、

「男はね」

もったいぶるように四人の顔を見渡してから、

「エロスなのよ」

だからあんたがエロスです！

それだけ言い終わると、満足したのか、いつものように部室の隅っこに行き、本を読みはじめてしまった。やっぱりこの先輩は読めないな。

「な、な、な、なんじゃこりゃあああ～」

ここにも読めない先輩が一人。

「先輩、弱すぎですよ」

どうやらハイは礼二とオセロをやっていたようだ。その勝敗を確かめるべくオセロ盤をのぞきこんだ俺はあり得ない光景を見た。

「猿先輩、これは歴史的な大敗ですよ」

昨日の夢の中で勇敢にぶちのめされていた少年も興奮した声を上げていた。

オセロ盤の上はほとんど真っ黒と言っていい状態だった。辱めを受けているかのようにポツ

眺めていると、

「ユウユウ」

不意に奇妙な名前が呼ばれた。しかし、この名前と呼ばれる人物はこの部室の中で一人しかいないし、この名前と呼ぶ人物も一人しかいないわけでした。

「どうした、夕渚」

振り向くと夕渚は「よいしょ、よいしょ」とか言いながら囲碁盤を運んでいた。誰がこんな本格的なもん持ってきたんだよと言いたくなかったのだが、今注目すべきはそこではない。

「俺が持ってやるよ」

俺は意図的に優しさを見せるなんて恋愛テクを持ち合わせていない。だが、あまりにも夕渚が危なっかしく運んでいたのも自然と手を貸していたのだ。そして、そんなに広くない部室を見渡してフリースペースを発見すると、ささっとそこまで持っていった。

対局する形でお互い座っていたので、必然的に夕渚の顔が正面にあった。

「あのさ、俺、囲碁のルール知らないんだよね。五目並べでもいいか？」

「えっ」ってな感じで目をパチクリさせている夕渚の表情は、恥ずかしくて視線をそらしたくなるくらいに可愛かった。

だがしかし、夕渚が驚いていたのは俺が囲碁のルールを知らないということに対してではなかったようで、

「これはオセロじゃないんですか？」

どこまでボケ倒せば気が済むんですか！

「ちゃんと白いのと黒いのがあるし」

「マス目が多いとは思わないのか？」

「上級者用かなあと」

夕渚を正面に眺めながらも思わず「はあ」とため息をついてしまったが、本人はそういう反応など全く気にしないようで、「どうしましょう？」なんて聞いてきた。夕渚と五目並べをしても絶対に一方的な展開になってしまうと踏んだ俺は、

「じゃあ、これでオセロするか」

「うん」

二人で上級者オセロをすることにした。

せっかく二人でゲームしてるわけだから、この上級者オセロをきっかけにいろいろと会話のキャッチボールでもかわそうと思っていたのだが、

「どうしてこんなわけのわからん研究会に入ったんだ？」

「今集中してるから静かにしてください」

「長沢の紹介か？」

「ユウユウ、うるさいです」

「意外に、礼二の紹介だったりして」

「ユウユウ、とっってもうるさいです」

「チンチラって何だ？」

「チンチラは可愛いです」

こんな感じで全く会話がはずまなかった。

囲碁盤のマス目を全部埋め尽くせるほど時間は多く残っていなかったの、案の定下校の音楽が鳴り始めて時間切れとなってしまった。

だが、今日は一人寂しく後片付けすることはなかった。それどころか夕渚と二人で後片付けをしているのだ。このままの流れで二人仲良く下校できるかなあなんて思いを巡らしていると、

「おい、チイ」

ユメが俺の裾を引っ張っていた。

「なんだよ」なんて言ってるうちに、「ユウユウ、また明日」と言いながら長沢と手を振っている夕渚を発見してしまった。もう、がっかりだよ。

「で、何の用だ？」

仕切り直すように聞いてみると、

「昨日のこと」

「斗真の話か？」

「違う。あちし、昨日、夢食ってない」

そう言えば昨日はあの後すぐに目が覚めたので、ユメが夢を食っている姿は見えていない。

「お前、一日四回も飯食ってるんだから夢食う必要ないだろ」

と、自分で言ってふと気付く。

「お前普通に飯食うのか？」

「当たり前だ」

「夢も食うんだろ？」

「当然」

「何でだ？」

「お腹がすくからに決まってる」

「いやいや、そうじゃなくて」

お腹がすくのであれば普通にご飯を食べればいいわけで、わざわざ他人の夢を食う必要はないはずである。

「どうしてお前は夢を食うんだ？」

「お腹がすくからだ。前も言わなかったか？」

「だから、そうじゃなくて、なんでご飯じゃなくて夢じゃないといけないんだ？」

「それは……」

ユメはどこかで見たことのある愁いの表情を浮かべると、
「それは、あちしが『夢喰い人』だからだ」
吐き捨てるように言い放った。

。

「ここら辺でいいか？」

「うん」

俺とユメは下校の音楽にペっペと吐き出されてしまったため、二人して高校の近くにある公園までやってきた。どうして二人してカップルのように公園のベンチに腰かけているのかと言うと、先ほどのユメの表情と言葉が気になったからにほかならない。

「でさ、夢喰い人ってなんだよ？」

おそらく広辞苑を引いても載っていないであろう言葉の意味を訊ねてみると、

「あちしみたいな人のこと」

まあ、わからなくもないのだが。

「お前は自分が夢喰い人なのが嫌なのか？」

さっきのユメは普段じゃなかなか見ることのできない表情をしていた。あどけなさの抜けきった、愁いの表情を。

「うん。だってまずいんだもん」

あの、いろいろあいだが抜けてますけど。

「幸せいっぱい夢はうまいんじゃないのか？」

「夢はおいしいんだけどね。あちしたちは夢ばかり食べてるわけにはいかないの。あちしたちにはあちしたちなりにやらなくちゃいけないことがあって、それをすると、すっごくお腹すくから、その充電のためにもせつせと夢を食っているというわけ」

「「あちしたち」って、お前みたいなやつが他にもいるのか？」

「いる。でも、見た目にはわからないから、あちしも会ったことない」

「会ったことないのによくいるなんて言えるな」

「いる。なんとなくわかる。絶対いる」

全く根拠はないようだが、この広い世界においてユメ一人だけがこんなへんてこな力を持っていると考えるより、他にも似たような力を持っている奴がいると考えた方が無難なのかもしれないな。

「要するに、そのやらなくちゃいけないことっていうのをするためには、飯からじゃ得られないエネルギーが必要で、そのエネルギーを得るために夢を食ってるんだな」

「そう」

「じゃあ、お前がやらなくちゃいけないことってなんだよ。あれか？ 地球侵略をたくらむ悪の組織と戦ってるのか？ そりゃあ、ドンパチやってりゃお腹もすくってもんだな」

結構自信ありで言ってみただが、

「チイ、あちしを馬鹿にしてるのか？」

ユメはお餅のようにプクリと頬を膨らませていた。

「馬鹿になんてしてないさ。むしろ尊敬の念を込めたつもりで言ったんだが」

「そうか。でも、馬鹿にされた感満載だぞ」

「そうかよ」

このまましばしの沈黙が続いた。

ユメとは知り合ってまだそんなに経っていないのだが、とんでも体験を含めた濃密な時間を過ごしてきたせいだろうか、この沈黙をぎこちなく感じることはなかった。したがって俺の妄想回路は停滞することなく熱帯低気圧のように渦を巻きまくりで、今隣にいるのが夕渚だったらどんなに心躍ることだろうと考えてみたりして、「とほほ」と年甲斐もなくため息をついてみたくなっていた。

先ほどまでの会話の流れとは全く無関係に、そう言えば初老って何歳からだっけ？ みたいなことを考えていると、

「すいませーん、ボールとってくださいーい」

ユメの足元にころころとサッカーボールが転がってきた。ちょっと離れたところから元気のいい小学生くんたちが叫んでいる。この少年たちから見れば俺もおじさんなのか？ いや、そんなわけないよな。そこまで齢が離れてるってわけでもないんだし。まったく、ピチピチの高校一年生をこんなにも憂鬱な気分させてくれるんじゃないよ君たち。さっさとお家に帰らないとお母さんが心配するぞ。お尻ペンペンされちゃうぞ。

なんて思っているうちに、

「あ〜い、いくぞ〜。おりゃああ」

背丈だけなら小学生とも言い張れそうなユメが勢いよくボールを蹴っていた。

「ありがとうございますーす」

そう言い残して少年たちは去って行った。

「チイ、あちしたちも帰るぞ」

俺の質問は置き去りかよ、なんて思いつつ俺は腰をあげた。背筋がピーンと張れていることと、「よっころしょ」なんて言ってないということを確認し、「俺はまだまだ若い」と自分に言い聞かせながら、俺も帰ろうかなと歩いていると、

「チイ、さっきの話なんだが」

くるりと振り返ったユメは水色の髪を揺らしながら教えてくれた。

「あちしら『夢喰い人』は『夢酔い人』を喰うんだ」

「またわけのわからん言葉を吐き出しやがって。帰り際に俺を悩ませるようなこと言うんじゃないよこの野郎」

「しっしっし。まあ、気にするな。んじゃ、バイバイだ」

「おう。また明日」

元気に腕を振ってバイバイしているあたり、そこまで深刻なことではないのだろう。嫌な理由についてだって、「まずいから」とか言ってたから、きっとそこら辺が気に食わないだけなんだろう。最後に言ってた『夢酔い人』にしたって、ユメがまさか人間を食うわけないから、夢の中で食う何かの例えなんだろう。

俺はそう思っていた。もしかしたらそう自分に言い聞かせていたのかもしれない。そうすることでユメのことを少しわかったような気になって安心していたのかもしれない。わけのわからないことを自分の理解の支配下において安心していたのかもしれない。

世界はそこまで単純ではないというのに。

世界は広い上に、深かった。

〇〇〇

高校生活はとても楽しかった。

誰かと関わってられる、言葉をかわせる、同じ時間を共有できる、同じ空間を共有できる。

そんな当たり前の高校生活が、とても楽しかった。

街では少しも感じられなかった自分という存在を、ここでは確かに感じる事ができた。

冷たい無表情で他人を拒絶する顔や、なぜだかいつも忙しそうで自分の世界しか見えていない個の集団が行きかう交差点とは違い、高校の廊下には暖かな声や賑やかな表情が溢れ返っていたから。

忙しそうにしている生徒もいるけど、

「——ちゃん、またね～」

友達のことには忘れていない。

忙しそうにしている先生もいるけど、

「こら、宿題ちゃんと提出せんか」

生徒のことには忘れていない。

ここが自分のいるべき場所だと思った。

高校それ自体が大きな一個の家のような気がしていた。

だって、みんな当たり前のように隣にいるのだから。自分の悩みや昨日あったことなんかを

思ったままに語りあっているのだから。みんな家族だと思っていた。

でも、違った。

帰りのホームルームが終わると、みんな教室を出ていった。部活に行ったり、街へくり出したり、自分の家に帰って行ったり。

だから放課後は嫌いだった。自分の隣に誰もいなくなってしまうから。自分が一人だと気付いてしまうから。

あれだけ温かかった教室も、がらんとむなしくて、広い分だけ寂しさが大きかった。

そんな教室を無意識のうちに見ないようにしていたのだろうか。空を見るのが好きだった。両手をめいっばい広げても抱えきれないくらい大きな空で、のびのびと翼を広げて飛んでいる鳥たちに視線が釘付けになった。

「どうして迷子にならないんだろう？」

こんなことを疑問に思ったりもした。

いつまでも教室にいることはできないから、一人でとぼとぼアスファルトの上を歩いていた。

広い道路に投げ捨ててある空き缶に自分の姿を重ねてみたりして、カラコロと音をたてて転がっていく様子に同情してみたりもした。

猫が毛を逆立ててニャーとなっていた。

放課後にいつも一人でいたからだろうか、瑠璃ちゃんが誘ってくれた。

へんてこな名前が書かれたかまぼこ板がぶら下がっている部室だったけれど、少し時間を過ごただけで、ここが私の部屋だと思った。自分が帰るべき場所だと思った。いつだって私の隣には誰かがいてくれたから。手を伸ばせば言葉が返ってきたから。

でも、やっぱり、違った。

下校の音楽が流れるとみんな帰っていった。自分の家へと帰っていった。

途中までみんなと帰るのだけれど、最後まで一緒にいることはできなかった。

一人になってふと気付く。

「私、どこに帰ればいいのかしら？」

長い間、家族と会話をしていないように思う。

「お母さん」

.....

「お父さん」

.....

「お兄ちゃん」

.....

いつから会話が無くなってしまったんだろう。

周りを見渡してみてもふと気付く。

「ここは、どこ？」

道路の脇に、綺麗なお花が供えられていた。

「私、何か大切なことを忘れてる」

思い出す前に、誰か私をさらってほしい。

瞳を閉じたら世界が真っ暗になった。

暗い世界が恐かったから、孤独な世界が嫌だったから、振り払うようにまぶたを開いてみたけれど、瞳には暗い世界しか映らなかった。

でも、やっぱり星たちはきれいだった。

決して戻らない時間のように、駆け足をやめない闇夜のそよ風が、少女の髪を優しく揺らしていた。

○○○

「なあ孝司、知ってるか？」

昼休みに入り弁当を広げるや否や尾村が話しかけてきた。

「知らん」

会話終了。と思っていたのだが、

「こら！お前そんなつれない返事返してくれるなよ。せめて話の内容だけでも聞いてくれ」

誰かと話してないと寂しくて死んじゃうウサギちゃんかよお前は。

「当然孝司もわかってるだろうとは思うけど、来週にはあのビックイベントがあるだろ」

「何かあったか？」

わざとらしく考えるふりをして、

「ああ、俺の誕生日か」

「一年に何回誕生してんだよ！」

「四回ほど」

「お前は四半期決算報告書か！」

なんちゅうツッコミだよ……。てか、なんの影響だよ。とまあ、おふぎはこの辺にしといて

。

「球技大会がどうかしたのか？」

俺たちが通っている納陵高校では五月の最終週に球技大会がある。名前だけ見ればこの大会の中にはいろいろな球技が詰め込まれていそうなのだが、いざふたを開けてみると、ただのバレーボール大会にすぎない。

しかしこの球技大会、バレーしかないからと言って侮ってはいけならしく、先生や、先輩からの話を聞いた周りのやつらの評判を聞くに、かなりの盛り上がりを見せるらしい。

その理由としては、試合自体が白熱するということもあるのだが、どうやら、最大の要因はそこではないのだそうだ。

球技大会を盛り上げる最大の要因は、くしくも入学早々のオリエンテーションで見せられたスライドショーの中に映っていた。そのスライドを目にした俺たちは、苦笑や「おお」などの歓声を体育館に響かせていたのだった。

そのスライドに映っていたものとは、生徒や、時には教師も巻き込んだ、仮装パーティーのような光景だった。

そうなのだ。俺たちが通う納陵高校では、球技大会における服装について特に規則みたいなものではなく、「運動ができる服装」とだけ注意事項のところに記載されている。このことについて俺たちは、「イベントごとは若者らしく大いにはっちゃけろ！」という、教師、生徒会側からのメッセージだと勝手に解釈しており、その一方的な解釈の結果生まれたのが、もはや伝統になりつつある仮装パーティー並に派手派手しい衣装での球技大会なのである。

中には試合が始まる寸前にジャージに着替えるチームもあるそうで、もはや唯一の規則すら守られていないように思われるのだが、教師もピースサインをしながらスライドに映り込んでいたあたりから察するに、怪我人や事故が起きなければ大方許されるのだろう。

「なんだよ、ちゃんと覚えてるじゃん」

「たまたまだ」

「でさ、どんな衣装でいくよ？ やっぱイベントごとと言えば運命の出会い無くして始まらんだろ。俺は昨日一晩中考えたんだけど、運命の人ってのは待っててもなかなかやってく来ないと思うんだよ。ということは、俺たちの方から歩み寄らなきゃいけないわけだ」

恋する乙女かお前は。

「そんなに運命の人捕まえたきゃ、ランニングシャツ着て、麦わら帽かぶって、虫かご肩からぶら下げて、虫取り網担いでりゃ完璧だろ。鼻水たらせば尚いいぞ」

「ふざけんな！」

「じゃあ、あれか？ 恋のハンターとか言って猟銃持ってくか？」

「捕まるわ！」

二人でびーびー騒いでいると、

「何の話をしているのかな？ 僕は角煮でもかまわんよ」

お前が何の話してんだよ。もしかして豚肉か？

「じゃあ俺は豚トロ」

斗真、お前もか。

立也と斗真を加えて四人になった俺たちは、この後数分豚肉話に花が咲いたのだが、さらに

二人の男子が加わったところで衣装の話に話題が戻った。

チームはクラスから男女別々の数チームに分けて決定される。チーム分けは自由なので、俺たちは仲のいい奴らを集めて一年七組Bグループという割り当てをもらった。

衣装については、クラス全体でそろえるところもあるそうなのだが、一年七組では各グループで好きな衣装を着てこればいいという意見が多数だったので、俺たちはいちいちこんなことであーでもないこーでもない議論をかわさねばならないのだった。

まあ、こういう話し合いは嫌いじゃないんだけどな。

授業開始ギリギリまで粘って考えていたのだが、なかなかいい案は生まれず、この話は明日以降に持ち越しとなった。

。

「よっしゃ。白が多数で俺の勝ちだ」

「ううう、ユウユウ強いです」

「いや、俺は人並だ」

「ううう」

俺と夕渚は部室でオセロをしていた。とは言っても、前回のように上級者オセロをしていたわけではなく、ごく普通のオセロ盤を使って遊んでいた。

当然のことながら、部室の中で俺と夕渚の二人っきりシーンが許されるはずもなく、いつものように暇な青春を送ってるメンツがそろって遊び呆けているのだった。どうしてみんなこんなにもこの部室に集まりたがるんだろうねえ。俺も人のこと言えないんだけど。

若干の違いを挙げるとすれば、先輩会員であるハイと雪女がまだ来ていないという点くらいだろう。

「孝司、お前、球技大会は何グループなんだ？」

「Bグループ。立也も同じ班。お前は？」

「俺はAグループだ。たぶん決勝トーナメントに行かない限りは当たらないな。そう言えばお前らどんな衣装着るんだよ？」

「まだ決めてない。そっちは？」

「俺たちはクラスでおそろいのTシャツ着るくらいかな」

「Tシャツだけだと？ お前はそれでいいのか？ お前の人生それでいいのか？」

「べつにウケとか狙ってないし。バレー勝負でいくぜ」

礼二はどこぞのスポーツ少年のようにぼっちリグーサインを決め込んでいた。礼二は長沢や夕渚と同じクラスだ。ということは、長沢と夕渚もクラスおそろいのTシャツを着るだけで、何の仮装もしないということではないか。二人の非日常的な衣を身にまとった姿を少しばかり期

待していた俺は、その少しの期待に似つかわしくなくらいの大ダメージを受けていた。

オセロに負けてぐったりしている夕渚と同じように、俺もだら〜んと無気力状態を身体全体で表現していると、

「待たせたね、諸君。来週の大一番に向けて、我々の戦闘態勢は整った！」

何の文脈もなくいきなり登場するこの先輩に誰か注意をしてやってくれ。歳の差とか関係なくさ。急に大声張り上げて現れるのだけは勘弁してもらいたいもんだ。後ろからスッと影のように現れる雪女も、あれはあれでどうかと思うんだけどな。いっそのことこの二人を足して二で割ってしまおうか？ いや、ダメだ。性格どうのこうのより性別不明になってしまう。

「え？ 球技大会って部活とかの団体は関係ないんじゃないんですか？」

時音の言う通りだ。いったい何の準備を整えてきたんだこのお二人は。

「決まっているではないか。我ら『おフロ研究会』は日進月歩で着々と会員数を増やしてきた。そして今や、部活として我らのキャリアをステップアップするべく、より一層の会員数を必要としている」

たぶん人数だけで部活とそれ以外を区別してるわけじゃないと思うんですが。その、活動内容をもっと充実させましょうよ。

と、まあ俺の心のぼやきが聞こえてる筈もなく、

「これは絶好の機会なのだよ時音くん。球技大会の場を借りて我ら『おフロ研究会』の存在をアピールできるまたとない機会なのだよ」

世界征服をたくらむ宇宙人の首領が決して叶わない欲望の妄想を膨らませて大きく両手を掲げているような感じで、ハイは語っていた。

「そこで用意したのが」

雪女が広げた紙袋からハイはもぞもぞと何かを取り出し、未開の先住民たちに文明の利器を見せびらかす啓蒙家のように雄弁に告げた。

「このリストバンドなのだ！」

小さいよ！ 字小さいから遠くから見えませんよ！

「我ながら力作だと思う」

ハイは、うんうん、と頷きながら、その力作を自らの腕に装着していた。

雪女から渡された宣伝用リストバンドには『おフロ研究会』という刺繍がほどこされてあるものの、そもそもリストバンド自体がそれほど大きなものではないからして、宣伝効果はあまり期待できなさそうだ。しかし、球技大会にリストバンドというのはファッション的にはなんら違和感がないので、当日これを付けることに対する嫌悪感というのとはなかった。

せっかく渡されたのだから、もらったその場で腕にはめるとというのがこの場の自然な流れであり、その流れに逆らおうとする鮭^{さけ}みたいなやつはあいにくこの部屋には一人もおらず、『おフロ研究会』メンバーおそろの共通ファッションが今ここに確立されたのであった。

「なかなかいいわね」

「うん。球技大会って感じだね」

というのが時音と長沢の感想で、

「うむ。鼻水拭くのちょうどいい」

これはユメの感想だ。

夕渚は何だかうっとりした表情でリストバンドを見つめていた。よほどうれしかったのか、すりすり頬ずりまでして、「ほわああ」とか言いながら危ない世界に浸っている。

「孝司」

肩を叩いてきたのは立也でして。

「このリストバンドを生かした衣装にしよう」

「例えば？」

「テニスウェアとかはどうだ？ こう、スカートをヒラヒラッと」

「何で女子なんだよ！」

「男子ウェアだといたって普通な格好になってしまうだろ」

「却下だ」

明日からの衣装会議は変な方向に走らないように注意が必要だな、なんて思っていると、

「一年男子」

背中がゾクツとするような冷たい声がお呼びだった。

「あなたたちにはそのリストバンドに加えてこれもつけてもらいます」

渡されたのはハチマキだ。

「『おフロ研究会』を宣伝しているからにはしっかり勝ち進んでもらわなくては困ります。負ければかりでは逆にイメージダウンになりますから。だから、それを巻いて気合いを入れてから試合に臨みなさい」

おいおい、ちょっと意外だな。いろいろ理屈をこねているけど、ようは俺たちに頑張ってくれっていうメッセージなんだろ？ 案外この先輩にも可愛いところがあるようだ。礼二にいたっては感動のあまり昇天しちゃってますよ。そりゃあ、大好きな先輩から「がんばってね」という思いの詰まったプレゼントをもらったらかうなるのも当然なのかもな。

いったいどんなメッセージが込められているんだろうと、昇天している一名を除いて、俺と立也でハチマキを広げると、

「……………」

「……………」

二人して絶句。ハイがどこかよそよそしげな表情をしている理由がすぐにわかった。

書かれていた言葉はと言いますと、

『男はエロス』

ハチマキの中心では堂々とエロスがその文字を主張していた。いったいこの先輩、どこまでが本気なんだろう。

「がんばりなさい」

雪女は無邪気な子供たちにプレゼントを渡し終えたサンタクロースみたいに満足げな表情を浮かべている。

おそらく俺たちにこのハチマキを巻かないという選択肢は残されていない。どこからどう見ても、どの角度から光に透かしてみても、『男はエロス』というメッセージは雪女の手書きなのである。これを巻いてこなかった日には、俺たちは、氷河に埋まっているマンモスと同じ末路をたどらなければならないこと必至である。

どうせつけたらつけたで周りの冷ややかな視線に耐えなければならないわけだが、氷柱^{つらら}につつかれるのと冷凍保存されるのとどちらが嫌かと言え、生命的危機を伴う後者の方が嫌なわけで、来週待ち受けている公開辱めの光景を想像して、俺と立也はブルブル震えているのであった。なんだかもう、いろんな意味で寒いです。

○

多くの生徒が待ち望んでいる日がやってきてしまった。

嫌味なほどに天気は快晴で、どこぞのサーカス団御一行様ですか？ と、問いたくなるような面々が、そのハチャメチャな衣装とは不釣り合いなくらい整然と列を揃えて座っていた。

生徒のうずうずした空気を察したのか、生徒会長と校長のあいさつはかなり手短かに終わり、今は準備体操の時間である。思い思いの衣装で身を包んだ生徒たちが真面目な顔をしてストレッチしている姿は冷静に見れば面白いのだろうが、あいにく俺にはそんな余裕などなかった。

その原因と言うのは、

「おい、孝司。お前と立也はいったいどんなプレイを楽しんでるんだ？」

当然、額に巻かれたメッセージは注目度抜群で、好奇の視線を掴んで離さない。二、三度チラ見するやつらも結構いるから、リピーター率もハンパないようだ。尾村のようなこういう愚問を投げかける奴には沈黙を持って答えることにしている。説明するのも面倒くさい。というか、俺たち自身もこのことについてはあんまり触れたくない。この際仕方ない、試合が始まるまではハチマキをとっておくことにしよう。

「他人の性癖に口出しするのは大きなお世話だろうからそのことは置いとくとして、俺たち、もうちょっと派手な衣装でもよかったな」

あれだけ悩んでいた当日の衣装はと言うと、野球部のユニフォームに決まった。派手もくそもない、そのまんま野球少年の格好をして俺たちは当日を迎えたのだ。なぜ野球部のユニフォ

ームかと言うと、俺たちが案に困窮しており、参考程度に同じクラスのAグループに「お前らどんな衣装着るの？」と聞いてみたところ、「サッカー部のユニフォームでいく」とのことだったので、その案に便乗してみたのだ。ちなみにユニフォームはというと、知り合いの野球部のやつらに貸してもらっている。

実際、当日となり、周りの様子を見てみると、男子の過半数はおとなしめの服装をしており、俺が見つけた限りでは、ふんどし一丁で男らしさを見せているやつや、ナース、女子の制服を借りたのであろうセーラー、といった女装系のやつらがちょっと浮いてるかなと感じるくらいだった。

一方、女子の方に視線を向けてみると、メイドやら猫耳といったいかにもなコスプレをしているやつらもいれば、全身着ぐるみというチャレンジャーたちもいた。中には、かっちりスーツで身を固めたキャリア系の女子もあり、もはやグラウンドはカオスをきわめている。

「孝司……」

ストレッチも終わり、第一試合開始までの空き時間となるや否や、よろよろっと斗真が現れた。

「俺、自分を見失いそうだ。マジ、若干気持ち悪い」

色とりどりの生徒たちに酔ってしまったようだ。

「お～い！タカジイ～」

どこから呼ばれているのかなと辺りを見回してみると、すぐに見つけることができた。宣伝用リストバンドが思わぬところで効力を発揮しているようだ。

チアリーダーの格好をした時音は長沢と夕渚を引き連れている。

「何してんだよ。いたいけな少女を二人も引きずり回すもんじゃないぞ」

「なに言ってんのよ。それより礼二とユメちゃんはいないの？まだ試合始まってないでしょ？」

時音はぐるぐると辺りを見回している。

「大声で名前呼びながら手をふってりゃそのうち見つかるだろ」

すると、予想通り礼二とユメは数分とかからないうちに見つかった。

「おお、チイも野球やるのか」

「衣装だ」

今日はスポーツデイだからであろうか、ユメの目がキラキラと輝いている。ユメはどんな格好をしているのかと言えば、天使の格好をして、どう考えても試合の妨げにしかならないであろう白色の翼まで生やしている。二組の連中はどんなテーマでコスプレをしているのだろう、後でチェックしてみる必要があるようだ。

「リストバンドしてるとけっこう便利だな。わかりやすくて。てか、時音のチアも悪くないな。うちの女子にも何か着てもらいたかったー。ちくしょう！」

礼二は長蛇の列で数時間並んだ後、ちょうど自分の前で「販売終了」の看板を見せつけられ

たお客のように、大げさな悔しがり方をしていた。

「着る前は恥ずかしかったんだけどね、着ると案外楽しいもんよ。動きやすいし、応援団にも早変わりできちゃうし。機能性にも優れてるみたい」

際どいラインをチラチラさせている時音にときめいてしまうのもなんだか ^{しゃく}癪なので、とにかく話を先に進めよう。

「はいはいそうですかい。で、俺たち集めて何しようってわけ？ 早く言ってくれないと斗真が立也連れてどっかいっちゃうぞ」

居酒屋でふらついていそうな酔っ払いのごとくふらっふらした状態の斗真を、立也が迷惑そうに抱えていた。

「あのね、せっかくだから『おフロ研究会』のみんなで写真撮りたいなあと思って」

と言って、時音はデジカメを取り出した。

「先輩らも探さんといかんだろ」

雪女を写真という形で客観的に見たなら、どんなふうに見えるのだろう。しゃべらなければ絶世美女なわけだから、写真に惚れてしまったりするのかもしれないな。その時に初めて俺は礼二に対する共感を覚えることになるわけで、いちいち面倒臭い手順を踏まなければ理解できない美しさという点では、雪女と芸術が同列になるわけだ。

なんかすごいところまで行ってしまいましたね。雪女先輩。

「そうなんだけど、とりあえず一年メンバーで一枚おさめておきたいなあ。だから、ほい、みんな寄った寄った。あ、尾村、写真よろしく」

時音がそばにいた尾村にデジカメを渡すと、

「お前相変わらず人使い荒いな。もうちょいおしとやかになった方がいいと思うぞ」

尾村はぶつぶつと文句を言いつつも、「いくぞー」と、こちらの準備が整うのを待っていた。

斗真も雰囲気を感じたらしく、ふらふらと尾村の側にまわりこみ、デジカメの液晶画面を覗きこんでいる。

そして、液晶画面に映っているのであろうこの面子を見渡してみてもふと思う。

「Tシャツ三人にチア一人と野球部二人、加えて勝利の女神って、この写真を見た十年後の俺は、自分が甲子園を目指してた野球少年だったのかと勘違いしちゃうぞ」

「ってことは、なんだ、俺と長沢と夕渚はマネージャーか？」

「そうなるな」

「僕はレフトがいい」

「どうせならもっと目立つポジションにしろよ」

こんな会話とは無関係に、隣ではユメがなにやらゴソゴソやっている。

「チイ」

「なんだよ」

「羽折れた」

「あとでくっつけてやるから我慢しろ」

いっこうにまとまりを見せない面々に、時音は痺れを切らしたようで、

「ああん、もううるさいわね。だったらこうしなさいよ。これなら勘違いしなくて済むでしょ」

そう言って時音は右腕を自分の胸のあたりに押し当てた。

「確かに。これ見りゃ過去を偽造しなくて済みそうだ」

全員がこれを胸の前で強調していれば、勘違いすることはないだろう。

「おい、孝司、せっかくだからとなり譲ってやるよ」

ここで礼二からのナイストスが。

「サンキュ！」

「気にすんな、ユ、ウ、ユ、ウ」

嫌味な笑顔たっぷり、気持ちの悪いことにケツをプリプリ振りながらケンカを売ってきた。

どついてやりたいのだがこいつからの御厚意ゆえ、俺は手を出せない。

どうやら尾村も痺れを切らしたらしく、

「お～い、まだか～。早くしろ～」

と叫んでいた。

「なにごちゃごちゃやってんのよ！ もっと寄らないと写らないわよ。ほら、もっと寄りなさいよ」

この後先輩たちを探し出してもう一枚撮ろうと計画している時音は、試合が始まる時間が気になるようで、なにかと急いでいた。早くしたいという気持ちを理解できなくもない俺は時音に協力するべく隣との距離を縮めてみたのだが。

その結果、

「ユウユウ痛いよお」

クレームが飛んできました～。

「なにどさくさにまぎれてセクハラしてるのよ、このエロタカジイ！」

「発情期か？ チイ」

「何もしてないって！」

百パーセントの濡れ衣なのだが、

「ユウユウ肘痛い～」

この^{せんじょう}煽情的な声に、俺の反論の声は太刀打ちできないようだ。みなさ～ん、俺、^{えんざい}冤罪にもかかわらず実刑くらいそうで～す。

「永峰くん、痴漢はダメだよ」

「人の厚意に甘えて犯罪を犯すとは見損なったぞ孝司」

「孝司、その一線は越えてはいけない！ またいではいけない！ 刺激してはいけない～」

「やかましいわ！ だから何もしてないっつーの！」

長沢までもが俺を変な目で見ている。なんたる屈辱。とりあえずどっかから飛び降りたい気分だ。

尾村ももう我慢の限界のようでして。

「お前らいい加減にしろよ。もう撮るぞ」

なんだか投げやりな感じでカメラを構えると、

「はい、チーズ」

この後、二人の先輩も捕まえて、『おフロ研究会』勢揃いの写真を撮った。

一枚目と二枚目、どちらの写真を見ても俺はこれがなんの集まりだったのか、すぐに思い出すことができるだろう。例え自分がよぼよぼのおじいちゃんになっていたとしても、忘れることなんてないだろう。この写真に写った全員の腕には、おそろのリストバンドがはめられていたのだから。これが、俺たちが『おフロ研究会』に所属していたという、まぎれもない証なのだから。

○

「ありえねえ。ああ、ありえねえ、ありえねえ」

今世紀最大の駄作を詠みあげる尾村に、

「マジ相手強すぎなんだけど」

お馴染みの焼きそばパンを頬張りながら、愚痴を垂れている斗真に、

「僕たちのチームはそんなに弱くなかったはずだ」

十戒を忘れてしまったモーセのような絶望っぷりの立也。

教室の中で三人がぼやくのも無理はない。俺たちのチームは午前中の予選リーグで見事に敗退してしまったのだ。もはや午後の決勝トーナメントへの道が断たれてしまったのである。飯食った後の俺たちは何をして過ごせばいいんだろう。礼二のチームは決勝トーナメント進出を決めたそうだから、他クラスではあるが応援でもしてやろうかな。同じチームにいた二人のメンバーも、「テニス部の先輩を応援してくる」とか言ってグラウンドに行ってしまった。

そもそも、立也が言うように俺たちのチームは決して弱いチームではなかった。だがしかし、Bチームであることがまずかった。俺たちの予選リーグには強豪チームばかりが名を連ねていたのである。結局、勝ち星は一つしか挙げるができなかった。

「五組は全員バレー経験者だったらしいぜ」

尾村がため息まじりでぼやいている。

「はあ、これからどうするよ？」

尾村の問いに、斗真はぐて～と寝転がって、

「とりあえず寝る」

お前は何時間寝れば気が済むんだ。成長期もたいがいにしろ。

「立也は？」

「僕は猿先輩といろいろ語り合いたいことがあるから」

日本統一についてか。はたまた、世界征服についてだろうか。

「じゃあ、孝司はどうするんだ？」

「俺は礼二の試合を見に行く。お前もどうだ？」

どうやら尾村も大してすることがないようで、

「しゃあねえか。俺もそうするわ」

ということで、二人とはおさらばして尾村と廊下を歩いていると、

「あれ？ あの子、今朝の子じゃない？」

四組の教室で一人の少女が窓の外をぼんやり見つめていた。

「ごめん、尾村。先に行行っててくれ」

言われた尾村は何だかニヤケ顔で、

「おうおう、お邪魔かよ。わかったよ。まあ、うまいことやれよ」

と言ってその場を立ち去ろうとして、ハッと気づいたように一言追加。

「変なことすんなよ」

「しねえよ！」

尾村はそのまま走り去っていった。

「ユウユウ？」

どうやら大声を出し過ぎたようで、夕渚はこちらを向いている。

俺は気を取り直して聞いてみた。

「なに一人でたそがれてんだよ。四組は礼二たちのチームが残ってるだろ。応援しに行かなくてもいいのか？」

「応援したいです。私も応援しようと思って瑠璃ちゃんたちと外に出ました。でも、教室に忘れ物しちゃって。だから、それを取りに来たんです」

夕渚は大事そうにリストバンドを握っている。

「忘れ物ってそのリストバンドか？」

こくりと頷いて、

「そうです。これは大事なものです。教室に忘れるなんて、一生の不覚です」

「だったら外すなよ。ちゃんと腕につけとけ」

「お弁当がつくと嫌だったんです」

どんな食い方すれば腕にご飯がつくんだよ。

「これ、そんなに大事なのか？」

「大事です。カレーについで福神漬くらい大事です」

あんまり大事さが伝わってこないのだが。

「なんならこのハチマキもやろうか？」

「いらなです」

ここはバツサリ切るんだな。

プイッとそっぽを向いた夕渚は、そのまま再び快晴の空を見つめていた。絹のように繊細な髪を風に泳がせている少女の後姿に、俺は数秒間見とれていた。

「そんなに空が好きなのか？」

夕渚の横に並んだ俺の横顔を見ながら、少女は答えてくれた。

「好きです。空は広いです。いろんなこと忘れちゃうくらい空は大きいです」

「何か悩み事でもあるのか？」

少年少女のお悩み相談室でも開いてやろうかと思っていたのだが、

「ユウユウはあの鳥さんたちが見えますか？」

無視かよ。

「み、みえるけど」

「どうして鳥さんたちは迷子にならないんでしょう？」

子供のように首をかしげている夕渚の姿はなんとも愛らしかった。

「仲間がいるからなんじゃないか。仲間が、「おーい、ここだよー」って教えてくれるんじゃないかな」

何気なく言ったことだったのだが、夕渚にとっては大層な驚きだったようで、

「ユウユウは鳥さんの言葉がわかるんですか。すごいです。尊敬です」

真顔でそんなこと言われましても……。

「わかるわけないだろ。何となくだよ」

「なあんだ」

よほどがっかりしたのか、少女は頭を垂れていた。枝垂れ^{しだ}柳^{やなぎ}のように垂れ下がった少女の髪が、万華鏡のように変わりやすくも美しい表情を浮かべる彼女の顔を隠してしまった。

「ユウユウ」

だからわからなかった。このときの夕渚は、いったいどんな表情をしていたのだろう。

「ユウユウは私の友達？ 私はユウユウの仲間？」

まったく、当たり前前の質問を投げかけてくれるなよ。

「俺は夕渚の友達だし、夕渚は俺の友達だ。もっと言うなら、『おフロ研究会』のやつらはみんな夕渚の友達だぞ。クラスのやつらだってたぶんな」

「じゃあ、私は迷子にならないですね。みんなが手を引いて連れていってくれるから」

うつろな少女の瞳には何が映っているのだろう。

「そうだな。実際、今日の朝、時音に引っ張られてたじゃないか。でもあれだぞ、知らないおじさんについて行くのはダメだぞ」

夕渚は手に持っていたリストバンドをくくっと腕にはめ、

「大丈夫です。これをつけている人にしかついて行きません」

いや、それは今日しかつけないんですけど。と言ってやりたかったのだが、『おフロ研究会』のつながりの証であるこのリストバンドをつけて、やけに嬉しそうにしている夕渚の笑顔を見ていたら、そんなことどうでもよくなってしまった。

ただの宣伝目的で作られたリストバンドなのだが、この少女にしてみたら「繋がり」以外の何物でもないようだ。そう言う俺も、このリストバンドに似たような感情を抱いてしまっているのだから、人間とは何て単純な生き物なのだろう。

「私ね」

今度は俺の顔を見ることなく、抜けるように青い空を見上げて、少女は語り始めた。

「最近、家族と話をしてないんです」

「反抗期か？」

「違います！」

怒ったように俺を見てから、視線は再び遠い空へ。

「返事がないんです。話しかけても返事してくれないんです。それに、私よく迷子になるんです。自分がどこにいるのかわからなくなるんです。だから、だから……………」

瞳がやけに眩しかった。泣いているのだろうか。

「心配すんな。家庭の事情はよくわからんが、その分俺たちと話せばいい。いくらでも聞いてやるぞ。迷子になったら俺たちを呼べばいい。そのために携帯電話があると言っても過言ではないからな。いつでも迎えに行行ってやる。ただし、トイレに行ってる時と風呂に入ってる時は無理だ。多少の待ち時間を要する」

夕渚は目をこすって俺の方を向いていた。

「ユウユウは優しいです」

「『おフロ研究会』のメンバーはみんなやさしいぞ。雪女だっけってきつと優しい」

「雪女？」

しまった……。

「まあ、要するに、何かあったら俺たちに相談すればいい。みんな親身になって聞いてくれるはずだ」

「はい。私には素敵な仲間がいっぱいです」

ひまわりにも負けないくらいの満面の笑みだった。

「そろそろ行くぞ。礼二たちが延々勝ち続けているとも限らんからな」

俺がその場を去ろうとして、ついてくるはずの少女の気配がないことに気付き振り向いてみると、少女は一步も動かずその場に立ち尽くしていた。

「欲しいジュースを買ってもらえなくてごねてる子供じゃないんだから、「動かない攻撃」したってジュースは買ってやらんぞ」

ふざけてみたのだが、やはり少女は動かなかった。俺は教室をいったん出て、今日はなんだか臭いセリフを吐きすぎたなあ、と一人反省会をしつつ数秒待っていたのだが、それでも夕渚はやって来なかった。「早くしろよ」という言葉と同時に教室をのぞいてみると。

「夕渚？」

少女は笑っていた。笑っているのだけれど、なぜだろう、泣いていた。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫。笑うか泣くかどっちかにしなきゃだよね」

「礼二の試合どうするんだ？」

「応援したいです」

「じゃあ、行くぞ」

「行きたいんだけどね、なんか、いろいろうれしくて、動けないの」

どんな病気だよ。新種発見か？どんな名前をつけてやろうかな。

「ほら、行くぞ」

俺は右手を差し伸べた。新種の動けない病にかかっている少女を動かすべく、そっと。

壊れそうなくらい繊細な感情をこぼしている少女を支えるべく、そっと。

「あ、ありがとうございます」

ひんやりと冷たい少女の指先を、ギュッと握りしめる。ほどけそうなくらい淡い感覚が滑り落ちていかにないように、少女の手のひらを確かに感じてみる。

「なんちゅう冷たい手してんだよ。もっと血行よくしなきゃだめだぞ」

お節介婆さんみたいなことを言っていると、

「ユウユウの手、温かいです」

この一言はやばかった。鼓膜の隣に心臓があるんじゃないかってくらいドクドクという心拍音のはっきりと聞こえた。顔が熱い。人体発火という摩訶不思議な現象は、もしかしたらこうして起こるんじゃないのだろうかと思うほどに。

「い、い、い、行くぞ」

一人で赤面していると、

「だから、動けないって言ってます」

ケロツとした顔で答えられ、

「わがまま言うんじゃない」

右手、右腕、右肩、背筋に至るまで、ありったけの力を振り絞り、

「うわああああ～」

そのまま引きずっていった。

「強引です、強引すぎます！ もはやこれは暴力です！」

「やかましいわ！」

二つのにぎやかな声が、決して交わることなく廊下に響いていた。

追いかけてこをしている残響も、いつまでも続くというわけではない。

廊下には終わりがあるのだから。

冷たい校舎を駆け抜ける二つの声が、その余韻を残しつつ、静かに消えていった。

○

カオスを極めた球技大会も無事幕を下ろした。今年も奇跡的にケガ人や事故という類^{たぐい}のハプニングは起きず、この様子だと来年もこのカオスっぷりは継続されるのだろう。

閉会のあいさつをするべく壇上に上がった生徒会長は、前期最大のイベントを無事やり終えたことに対する安心感からなのか、はたまた、やり遂げたことに対する達成感からなのか、わんわん泣いていて、いったい全体何をしゃべっているのかわからないという状態だった。

感動という名の感情はどうやら伝染しやすいようで、俺のクラスでももらい泣きしている女子なんかが何人かいた。俺たちには来年再来年もこの行事が待ち受けているわけで、こいつらは毎年このように泣くのだろうかと思いつつも、この涙がクラスを団結させたりするのだろう。明日からの俺たちのクラスは何かが変わっているかもしれないな。

ところで、俺と夕渚はあの後試合に間に合ったのかと言うと、なんてことはない、余裕で間に合った。なんと礼二のチームは学年別で行われるトーナメントの決勝戦にまで上り詰めていたのである。

というわけで、俺たち『おフロ研究会』一年メンバーは、閉会式後に全校生徒に配られた紙パックのジュースを飲みながら、校門の片隅で礼二の健闘をたたえているのであった。

「くそ～。あと一步で優勝だったのに」

試合が終わった直後はかなり悔しそうな顔をしていた礼二も、今となってはちょっとした充実感のようなものが見て取れる。

「いいじゃないか。準優勝だろ？ 俺たちなんて予選敗退だぞ。暇すぎてお前の応援なんかしちゃったよ」

一緒に応援していた夕渚の方に視線をやると、

「そうです。すごいです。興奮しました」

先ほどの無礼は記憶の片隅に追いやられているようだ。

「長滝くんたち格好よかったよ。クラスの女子とかみんな、「惚れた～」って言ってたし」

長沢も憧れの先輩を見るような目で礼二のことを見ている。たった一日にして礼二の株がこんなにも急上昇するなんて、うらやましい以外の何物でもないぞ。来年こそは何とか決勝まで行きたいもんだ。

「孝司、来年は頑張るぞ」

立也は誓いの握手を求めてきた。握手に応じてやりたいところだが、その前に、同じクラスになれるかどうかの問題だ。

「チイ」

ユメが後ろからつついてきたので振り返ってみると、

「ストロー落ちた」

ユメは、溺愛している飼い犬の首輪を外した瞬間、全速力で逃げられた飼い主のような表情で俺を見ている。

「三秒ルールって知ってるか？ 拾ってフウフウすれば大丈夫だ」

古今東西無敵のルールを教えてやるのだが、

「いや、そうじゃなくて、こう、ジュースの中に入った」

それはもう、救出不可能です。

「パックに口付けて飲むしかないな。我慢しろ」

ユメは「しかたない」とか言いながら、再びジュースを飲みはじめた。

そして、ユメがジュースの最後の一滴まで飲みほし、「いや、もうジュース入ってないから」とつつこんでやりたくなるくらい、紙パックをペしゃんこにしていたちょうどその時、

「ねえ、みんな。明日、部室で礼二の準優勝記念パーティーをやりましょうよ」

何かと記念日を作りたがる女代表みたいなやつがここに一人。

「部室って言ったって、飲み食いバカ騒ぎはまずいだよ。いくら寛容な教師だってそこまでは許してくれん」

「大丈夫よ。バレなきゃいいんだから。それに、私たちは毎日バカ騒ぎしてるじゃない。そこにジュースとお菓子が加わるだけよ。教師だっていちいち覗きになんてこないわ」

確かにバカ騒ぎはいつものことなのだが、

「先輩たちだっているんだぞ。そっちの許可だっているだよ」

と言い終わるのが早かったか、こっちの方が早かったか。

「その点なら心配いらん」

ニョキッと俺の背後からハイが生えてきた。いったい、いつからどこから現れたんですか！だから言ってるでしょうに、この人の登場の仕方は何とかしないとイケないって。

「そのパーティー、許可する」

ハイは、キラーン、とかいう効果音がつきそうな物腰でオーケーサインを出していた。

「ありがとうございます、先輩」

時音は早くも感謝を述べているのだが、

「まだ雪女もいるだろ」

全員が「それ誰？」みたいな表情をしている。でもなぜだか視線は俺を通り越していて……。

「永峰、雪女って誰？」

一、二、……って数えるまでもなく全員揃っている。そもそもこの場にいないのは一人しかいないわけでした。みなさんさようなら。だがこれだけは言うておく、冷凍状態で発見されてもかき氷にだけはしないでくれ。なんかめっちゃくちゃ痛そうだから。

とまあ、極限の被害妄想はこのへんにしといて、

「雪女？ やだなあ、ははは。俺はユキナって言うただけですよ。でも違いますよね。ははは。先輩はミリナでしたよね。ナしかあってませんよね。ははは」

苦しい、むしろ痛い言いわけだったのだが、

「そ、そんな」

雪女は頬を朱色に染めている。しかも、まさかの乙女の仕草で、

「名前で呼ぶなんて、永峰ったら、永峰ったら」

スカートの裾をいじらしく握りしめて、

「ほんつとに」

ウィンク一つ。

「エロスなんだからあ」

「……………」

やっぱりこのオチですか。

これが原因なのかは分からないが、とにかく機嫌をよくした雪女は時音の提案を快くオーケーしてくれた。

突如思いついた計画かつ開催日が明日ということもあり、買い出しは今日中にしなければならなかった。先輩達には気を使って先に帰ってもらい、今は一年生メンバーだけで、高校の近くにある大型スーパーへと足を運び、買いだしをしている最中である。

球技大会が終わったばかりでもうくたくただというのに、お菓子を買う時の女子はどうしてこんなにもキラキラ輝いた顔をしているのだろう。

「チイ、あちしはね、これと、これと、これと、これと、これと、これと、これと———」

「そんな小粒なもんばかり選ぶなよ。もっと大きな袋に入ったやつにしろ。これとか」

大人数で手を伸ばしながら食べられそうなお菓子をかごに入れたのだが、納得いかないような顔をしてユメは首をかしげている。

「なんでだ？ あちしそんなに食べんぞ」

「お前一人で食うんじゃない。もういいよ、お前は時音の方に行ってジュース選んで来い」

「ほ〜い」

スポーツまみれの一日だったからであろうか、今日のユメは聞き分けがよく、跳ねるようにして時音と礼二が待つジュース売り場の方へと消えていった。

「そっちはどんな感じだ？」

かごを持った立也が長沢と夕渚とともに現れた。

「こんなもんでいいだろ。あとは礼二がジュースのかごを持ってるから、俺たちもそっちに合流しよう」

「そうしよう。あのさ孝司、僕はちょっとトイレに行ってくるから、これ持っててくれ。あとですぐ行くから」

立也はトイレの方へと小走りで去っていった。残された俺たちは三人でジュース売り場に向かうことにした。両手に花ならぬ、両手にかごですよ。

ジュース売り場に向かう途中、俺の後ろから「わああ」とかいう歓声が聞こえてきたので振り向いてみると、夕渚と一緒に歩いている長沢を置き去りにして、ハチミツを見つけたミツバチのような猛スピードで、あるコーナーへと吸い寄せられていた。

俺と長沢が顔を見合せ、何が起きたんだ？ みたいな顔をしていると、

「瑠璃ちゃん、ユウユウ、こっち来てー」

夕渚は、どんぐりを見つけた三歳児のような無邪気さで俺たちを呼んでいる。

「どうしたの？」

「なんだよ」

近づいてみるとそこは、カップケーキやらプリンやらシュークリームなんか並ぶスイーツコーナーだった。

「このケーキ買っちゃだめかなあ？」

夕渚はカップに入ったショートケーキを手に取りながら、俺と長沢の顔を交互に見つめている。

「う〜ん、どうかなあ〜、永峰くんがiiiって言ったらしいよ」

長沢は俺に判断を委ねてきた。そんなこと言われましても……。

「どうかなあ」

九人分買ったら結構値段もするだろうから……、なんて悩んでいるうちに、

「あれま、お菓子選び終わった？ 何してんの？」

時音と礼二が。

「おお、追いついた。すっきり爽快だ」

ハンカチで手をふきつつ立也が。

気付けばスイーツコーナーに全員勢揃いしていた。

「夕渚がこれ買いたいんだと」

夕渚が持っているカップケーキを指差すと、
「いいじゃない。ケーキのないパーティーなんてパーティーじゃないわ。そうだ、どうせなら大きな丸いケーキを買いましょうよ」

時音はかなり乗り気なのだが、

「でかいケーキってけっこう高いぞ」

礼二も俺と同意見のようだ。全員揃って念仏のように「う～ん」と唸っていると、

「じゃ、じゃあ」

控え目に長沢が発言した。

「材料だけ揃えてもらえれば、私が作ってくるよ」

長沢の手作りケーキが食べられるチャンス到来！ ということで、この機会を男子が拒否するはずもなく、当然、ケーキを食べたい女子たちだって拒否することはなかった。

「瑠璃ちゃんありがとう。遠慮なく、お願いします」

時音を筆頭に全員でお礼を言ってから、ケーキの材料を買った。ケーキの材料をスイスイ買っていくユメを除いた女子三人を見ながら俺たち男連中プラス一名は、

「なんか新婚生活っぽいな」

学校では見ることのできない三人の姿に、妙にテンションが上がっていた。普段見せない女子のこういう一面がこんなにも強力なもんだとは知りませんでしたよ。

「なんだ、もう夕渚との新婚生活がお前の妄想劇場では始まっているのか？」

洋画劇場みたいなノリで言うんじゃないよ。

「そうなのか、孝司は夕渚さんなのか。じゃあ僕は長沢さんにしようかな」

立也、変な話に乗ってくるのはやめてくれ。かごを持ったまま、視線は長沢の後姿を追いかけている。なんかこれ、危くないか？

「ちょ、ちょっと待て。俺が長沢だ。池中は時音にしてくれ。俺にはあいつを扱い切れない」

数本のペットボトルが入ったかごを揺らしながら礼二が抗議の声を上げていた。

ほら見る。わけのわからん会話が始まってしまったのではないか。というか、礼二はほとんど悪ノリだ。何か顔が芝居臭い。

「僕は長沢さんの方がしっくりくる。すまんがここは手を引いてくれ」

とうとう妄想劇場のヒロイン争奪戦が始まってしまった。人間の脳みそって偉大だな。誰もがみな無限の世界を持っているようだ。

「無理、それ無理。こうなったら仕方無い、ジャンケンで勝負だ」

そろそろその三文芝居やめようよ。お前は雪女に惚れてるんじゃないのか？

「のぞむところだ」

二人は妄想劇場のヒロインを決するべく決闘を始めてしまった。たかが妄想ごときでここまで熱くなれる二人に俺は拍手を贈るべきなのだろうか。いや、やめておこう。拍手の価値が下

がってしまう。

「うむ、じゃあ、あちしは友里がいい」

二人の隙に乗じて、何の話をしているのか全くわかっていないであろうユメが時音をゲットしてしまった。おいおい、ユメ、そいつらには近づかない方がいいぞ。

「これで残るイスは一つだな。いくぞ、じゃんけん、ぽん」

礼二はグー。立也はパー。ということで、

「やりましたよ、猥せんぱ〜い。勝ちましたよー。やっぱりじゃんけんはパーです」

どこに喜びぶつけてんだよ。てかもうジャンケンに勝った喜びにすり替わってますから！ヒロインどっかに飛んじゃってますから！

「あ〜負けちまった。悔しいぜ〜」

全然悔しそうには見えない礼二はこの三文芝居に幕を下ろしたようで、

「なんだかんだで俺、結構明日が楽しみなんだけど」

重そうなかごを揺らしながら笑っていた。

「そうだな。僕は、ちょっとしたことでイベントに結びつけるというのは悪いことではないと思う。時音さんには感謝するべきだ。なんか僕たち、青春っぽい日々を過ごしているじゃないか」

いつもの調子に戻った立也も感慨深そうだった。もしかして、さっきのくだりはこいつも芝居だったのだろうか。

「ユウユウ〜」

夕渚が俺を呼んでいた。

「ちょっと、タカジイ。一番軽そうなかご持ってるんだから、ちゃんとしてきてよね」

時音ももうちょっとおしとやかだとありがたいのだが、こいつがこういう性格だからこそ、今の俺たちの関係が生まれているのかもしれないわけで、十人十色の良さが身にしみてわかるような気がするのは日々俺たちが大人への階段を上ってるからなのだろうか。

○

「ケーキの材料は瑠璃ちゃんよろしく。あとのお菓子やジュースは男子で手分けして持ってきてちょうだい」

時音が手際よく四つの袋をポンポンと割り振っていた。

「どうしてお前はなんにも持って帰らないんだよ」

俺は当然の不满を口にするのだが、

「だってお菓子とジュースはちょうど三袋におさまったんだもん。いいじゃない」

いるよな、こういう都合のいい時だけ「私、女の子だもん」みたいな顔して面倒な仕事を回

避けようとするやつ。

とりあえず明日の準備が整った俺たちは、球技大会の疲れが残っていることもありすぐに解散することになった。「バイバイ」とか「また明日」とか言う声とともに各々帰路へと向かっていく。俺は途中まで礼二と時音と一緒に帰り、すぐにまたバラバラになって、自分の家について。普段ならご飯を先に食べるところなのだが、今日はたくさん汗をかいたのでお風呂に先に入りそのあとに夕飯を食べた。夕飯を食べ終えた後はいつものようにテレビを見ていたのだが、だんだん眠たくなってきたので、いつもより少し時間は早かったがもう寝ることにした。

今日は疲れてるからたぶん夢なんて見ないんだろうなと思いつつ横になったわけだが、この予想は半分当たりで半分外れだった。

と言いますのも、

「チイ」

聞き慣れた声に俺の視界が開けた。

疲れていたためちゃんとした夢を見ることなく、無とも言える快眠の時間を俺は過ごしていた。この心地よさは俺が目を覚ますまで解けない永久^{とわ}の癒し空間になるはずだった。

しかし、こともあろうに傍若無人なユメとかいう小娘が、何の躊躇もなく人の癒し空間に入り込み、さらには「おい！ チイ！」とか叫びながらこの俺をたたき起こしたのだ。突然のことに周りをキョロキョロ見回してみたら、確認のため頬をつねってみたが全然痛くない。

何度も言うようだが、頬をつねっている時点でもう非日常体験はスタートしているのだろう。こいつのどこまでも自分中心的な性格に驚嘆の思いを寄せつつ、「せめて今日ぐらいは爆睡させてくれ」とぼやいてみたものの、よく考えれば今の俺は寝ているのである。現状把握のなんと難しいことよ。

まあ、こいつがなにしにやってきたのかはだいたい想像がつくが、一応聞いてみる。

「なにしに来たんだよ？」

答えは当然、

「あちし、チイの夢食う」

そりゃあ今日の俺の夢はおいしいだろうよ。試合は予選敗退だったものの、その後は夕渚と二人きりで話をして、寛容な解釈で考えるなら手だってつないだのだ。脂乗りまくり、匂真っ盛り、食べなきゃ損損になるのも当然なわけですよ。

斗真の時のこともあるから今日のユメは絶対引かないだろう。だが、タダで夢を食わせてやるのも腑に落ちないので交換条件をもち出してみることにする。

「食ってもいいけど、一つだけ条件がある。俺を夕渚の夢に連れてって。その後に俺の夢を食わせてやる」

よい子のみなさんはマネしないでください。これはタブーです。何がタブーかって？ そんなの決まってる。女の子の夢を覗くことがタブーなんだよ。

でも今日の俺にはいろいろな下心があるわけではない。いや、嘘じゃないって、マジだって。思い出しても見ろよ。今日の夕渚はなんて言ってた？ 家族と会話をしてないとか言ってただろ。大きなお世話かもしれないが、そこら辺のことを俺は何とかしてやりたいと思ってる。そう思うのは当然のことじゃないか。夕渚の夢にもぐりこんでみれば、斗真の時みたいの原因らしきものが何なのかわかるかもしれない。きっかけさえ分かれば解決までには導いてやれないとしても、アドバイスみたいなことはできるはずだ。

だがちょっと待てよ。こいつに夢を食われちゃったら夕渚の夢に忍び込んだっていう記憶もなくなってしまうではないか。そりゃまずいな。しかたない、明日学校でユメに夕渚はどんな夢を見ていたのか聞いてみることにしよう。

「絶対食わせてくれよ。約束だぞ。移動するのだってエネルギー使うんだからな。あちしホントにお腹ペコペコだぞ」

ぐったりとした姿勢でお腹をさすりながらも、ユメは俺の条件をのんでくれた。

「いくぞ」

いつものように差し出されたユメの右手を俺は握った。脳みそを吸引力抜群の掃除機で吸われるような感覚に襲われながらも、両足には確かな感覚がよみがえってきた。

都会のアスファルトを俺は踏みしめていた。

ここが世界の中心なのではないかと思うくらいに人が多い。流れる人の波を誘導するように、周りには大小無数のビルが立ち並んでいる。俺たちはどこかのオフィス街の中心に降り立ったようだ。車の騒音がやかましく、移り行く人々の表情がとても冷たい。

「ここって夕渚の夢の中だよな？」

夢の中に決まっているのに、俺はこんな疑問を投げかけていた。なぜなら俺はちょっとした違和感を感じていたからだ。その違和感とは、

—————夢にしては現実的すぎる—————

そう、この世界にはリアリティがありすぎるのだ。

洪水のようにうごめく人の群れ、耳障りな騒音、むせるほどの排気ガス、ドブ臭い外気、窓越しに見える人の影、点滅する信号機、地面にこびりついたガムに捨てられたタバコ。

日の光すら暖かさを感じてしまう。とても夢の中とは思えなかった。

「チイ、これはよくない、すごくよくない」

ユメは俺の手をギュッと握りしめていた。その手は少し湿っている。すごくよくないと言われたって、俺にはどの辺がよくないのかなんて全くわからない。

わかることと言えば、

「今までの夢の中となんか違うよな」

自分の夢や斗真の夢、どこかの誰かの夢の中とも違う感覚。なんて言えばいいのだろう。こう、ふわふわした感じがない。ぼんやりとした感じがないのだ。

「夢と現実がごちゃ混ぜになってる。境界が無くなってる」

ユメは自分の感覚を研ぎ澄ますようにしてじっくりと周りの様子をうかがっていた。
そして頷く。

「間違いない。ここは『夢酔い人』の夢の中だ」

いつぞやの帰り際に聞いたあの言葉。あの時は深く追求しなかったから、夢酔い人ってのはどんな人のことを言ってるのかわからない。そもそも人なのかすらあやしいところだ。あれ？でも俺はこの夢に来る前に、ちゃんと行き先を指定したはずだよな。

「おいおい、ここは夕渚の夢の中じゃないのかよ」

俺の驚きなど気にも留めず、ユメはまだ周りを見渡していた。なにかを探しているかのように、じっくりと。

「ここは美園の夢の中だ。つまり、美園が『夢酔い人』ってことになる」

話が急展開すぎる。てことはあれか、夢酔い人ってのは人間のことなのか？ だとしたらユメは人食い少女ってことになるよな。でもさすがにそれはないだろ。こいつが人間食ってるなんてあり得ない。

「夢酔い人ってなんだよ。お前、夢酔い人を食うとか言ってなかったか？」

ユメはこくりと頷いて、

「あちしは『夢酔い人』喰うよ。そのためにチイたちの夢食ってるんだから。でも今日はちゃんと喰いきれるか微妙だ。チイのせいでお腹ペコペコだからな」

やっと俺の方を向いてくれた。いつもと違う雰囲気であって、ユメのいつもと変わらない膨れっ面は何とも頼もしい。

「ってことは、お前は夕渚を食うってことか？ そしたら夕渚はどうなるんだ？ 悪夢から解放されるとかそんな感じか？」

この夢の中が悪夢だという印象は全く受けないのだが、いかんせん解釈のしようがない。だって、夕渚がユメの胃袋の中におさまってるなんて光景、想像できないじゃないか。

「ちがう。あちしは美園そのものを喰う。だから美園はいなくなる」

「夢の世界から？」

夢の世界から主人公がいなくなるなんてのも変な話だが、現実世界から消えてしまったらそれはもう事件であり、一昔前で言うところの神隠しである。いなくなるとしたら夢の中からは考えられない。

しかし、ユメは首を振って、

「現実世界からもどっちもだ。そもそもチイは勘違いしてる」

勘違いも何も、一切説明されてないんですが……。だいたい現実世界から消えてしまったら夕渚はどこ行っちゃうんだよ。残された道といたらお星さまになることくらいしかないじゃないか。

こんな疑問に満ち溢れた俺の表情を見かねたのか、普段じゃ決してみることのできない引き締まった表情でユメは教えてくれた。

「美園はもともといなかったんだ。美園は夢を見続けてるんだ」

「は？ じゃあ俺たちが見てきた夕渚はなんだったんだよ。あれは幻なんかじゃなかったぞ。夢から出てきた夕渚が実体化して現れましたなんて、どこかの映画みたいなことあるわけないだろ」

まったくもって、俺の理解の範囲を軽くK点越えしている。

「その解釈が一番近い」

やばいよ。当たっちゃったよ。K点越えちゃったよ。

「『夢酔い人』は思いが強すぎるんだ。たぶん何かやり残したことがあるんだろう。厄介なことに見た目では普通の人と区別がつかない。だからあちしたちは夢の世界を巡るんだ。今みたいな違和感は、ここが『夢酔い人』の夢だという証拠」

どうやらユメたちは無駄に他人の夢をほっつき歩いているわけではないようだ。ちゃんと自分の役割を果たすために巡回しているらしい。

それにしても気になるのは、

「もともといない？ やり残したこと？」

この世になくてやり残したことがあるって、俺の頭の中ではよくない方向に整理されつつあるんだが。

「そう。正確には途中でいなくなった」

なんかさらりと言ってくれちゃってますけど、これは決定的な一言なんじゃないのか？

俺の頭の中で進んでる方向が正しいとしてもだな、そんな非常識なことがあっていいのだろうか。だって俺は昨日確かに夕渚と話をしたし、手だって握った。だからわかる。昨日の夕渚は夢なんかじゃなかった。夕渚はそこにいた。昨日に限らず夕渚との思い出はたくさんある。様々なことが起こる日常の中でも色あせない大切な思い出が。

でも俺はそんな非常識を頭の中で完全には否定できないでいる。なぜなら、この世界は、夢の中を巡るといふ非常識が通用してしまう世界なのだから。

俺の中ではほとんど答えが出来上がっていた。夢酔い人とは簡単に言えばどんな人なのかという答えが。

「じゃあ夕渚は——」

なぜだか至ってしまった結論を口にしようとしたその時、墨汁をぶちまけられたように世界が真っ黒になった。隣にいるユメの顔すら見えない。そのかわりに研ぎ澄まされた自分の感覚でふと気付く。俺はユメと手をつなぎっぱなしだったのだと。俺は手をぎゅっと握りしめ、「チイ、痛い」という声を聞いて安堵する。

「どうなっちゃったんだよ」

「わからん」

動くに動けない状況が数秒間続いたのだろうか。何の前触れもなく明かりがポツポツと咲きだした。一つ一つの明かりが降りはじめ、景色がだんだんと戻ってくる。

俺とユメはさっきまでと同じオフィス街にいた。しかし、先ほどまでの騒音や異臭、酔うほどの人の流れは消えている。

ふと見上げた夜空には、輝く星たちが散らばっていた。

「ユウユウ」

まだ聞き慣れない名前を呼ぶ方に視線を向けると、一人の少女が立っていた。

透き通るようにきめ細やかな肌に降り注ぐ星の光が少女を照らしていた。引き連れた闇夜も少女を際立たせるための脇役でしかない。危ういほどの白い肌が映えていた。夜風に^{まさぐ}弄られる少女の髪は妖しいほどに^{いろ}艶っぽい。

「ユウユウ」

少女は何度も俺の名前を呼んでいた。

〇〇〇

—————何か大切なことを忘れてる—————

中学の頃の日常は、あまり楽しくなかった。小学校の頃は仲が良かった友達とも、知らないうちに口数が減っていたから。自分が女の子に生まれてきたことが嫌だった。周りの女子は知らないうちに数個のグループを作り、お互いに牽制し合っていた。グループの中ですらお互いの腹の内を探り合っていた。

どうして全員で一つになって会話をしないのか理解できなかった。どうして人の悪口を言い合うのか理解できなかった。多勢が無勢を攻め立てる教室に嫌気がさしていた。

だからだろうか。気付いたら私は一人だった。

でも一人は嫌じゃなかった。無理をしてみんなと慣れ合うよりは、一人でいた方が自分に正直だと思ったから。自分の気持ちを見ないふりして毎日をすごしていけるほど、私は器用じゃなかったから。

いじめられたりはしなかった。私は不器用だけど、愛想が無いわけではなかったから。ただ心から信頼して話せる友達がいなかっただけ。

一人でいるのは嫌じゃなかったけれど、やっぱり心から打ち解けあえる友達が欲しかった。

だから高校は少し離れたところに行こうと思った。気分を改めるため、またゼロからスタートしようと思った。

お父さんもお母さんもいいよって言ってくれた。私がいいと思うならそれが正しいことなんだって言ってくれた。

うれしかった。

私はこの高校を選んで本当によかったと思う。たぶん、私の人生の中で一番の出会いがここにあったから。

『おフロ研究会』には変わった人ばかりいた。その名前に負けないくらい、みんな個性の塊だった。

時音さんは自分の言いたいことズバズバ言ってどんどん引っ張って行ってくれる。瑠璃ちゃんは誰にでもわけ隔てなく優しいから、自分もこんなふうになりたいと思った。ユメちゃんは自由奔放で、ピョコピョコ歩く姿がとってもかわいかった。長滝くんはふざけたことばかり言ってるけど、何かに真剣になったときは本当にかっこいい。池中くんは真面目なんだけど、どこかずれてて面白い。獏先輩は意味不明だけど、ちゃんと研究会をまとめてくれてると思う。海老沢先輩は、よくわからないけれど、あの人こそ個性の塊だと思う。

そして、ユウユウはとにかくいろんな人の話につっこんでいると思う。なんだかいつも疲れたような顔をしている。疲れたんだったら放っておけばいいのに、すぐまた人の話につっこみを入れている。きっと世話好きなんだと思う。本人に言ったら絶対否定するだろうけど、間違いなしと思う。

だって、私が一人でいるとユウユウは隣に来てくれるから。話し相手になってくれるから。

————俺は夕渚の友達だ————

ユウユウは何気なく言ったのかもしれないけど、私は心の底からうれしかった。うれしすぎて涙が出てきて動けなくなったときも、世話好きなユウユウは私を引っ張って行ってくれた。温かなその手に、私の心までさらわれそうだった。ちょっと乱暴だったけど、それぐらいでちょうどよかった。自分とユウユウの間には遠慮の壁がないってわかったから。よそよそしい壁がないってわかったから。

『おフロ研究会』のみんなはお互いのことをあんまり褒め合ったりしないような気がする。女の子同士でもそういう会話はあんまりない。むしろケンカっぽいことの方がよくあるような気がする。

でもなんでだろう、みんなすごく仲がいい。たぶん言葉なんていららないんだと思う。自分と誰かの絆を確かめるのに言葉なんて必要ないんだと思う。相手の心にズカズカ踏みこんでいく勇氣と、相手にそれを許して心を開いておける勇氣。この二つがあれば時間の長さなんて関係なく仲は深まっていくんだと思う。

こんなに自由で心地よい仲間といわれることが不思議に思うけど、これが出合いなんだと思う。私が踏み出した一步は間違いじゃなかった。

宣伝用にもらったこのリストバンドは私の宝物だ。明日からは普通の授業が始まる。腕につ

けていくのは恥ずかしいから、ポケットの中にでも入れておこう。自分のそばから離しちゃいけない気がする。

明日の放課後が楽しみで仕方無い。パーティーなんてしたことがないから。気を許せる友達といる時間が楽しくて仕方無い。ケーキだってすごく楽しみだ。ただのケーキじゃなくて、瑠璃ちゃんの手作りケーキだから。友達に囲まれて友達の作ったケーキを食べる。美味しいに決まっている。自然と顔がほころんでくる。

スーパーの帰り道、やっぱり私は迷子になった。

ユウユウを呼ぼうかと思ったけれど、道路のわきに供えられているお花が目にとまり、近くに行きたくない気持ちとは裏腹に勝手に足が動いてて、気付けばお花の目の前に立っていた。

今までもちらちら視界には入っていたけれど、見ちゃいけないような気がしていたから近づかなかったのに。

お花のそばにはアップルパイがそえられていた。

「お母さんとよく一緒に作ったなあ。お母さんが好きだったから」

ビールがそえられていた。

「お父さんがいつもおいしそうに飲んでたなあ」

スナック菓子がそえられていた。

「お兄ちゃんがよく勉強の合間に食べてたなあ」

お線香がそえられていた。

涙が出てきた。

「お母さん、お父さん、お兄ちゃん……………」

気付いてしまった。

会話が無いのではない。返事がないのではない。会話がしたくても、返事をしたくても、家族にはそれができないのだ。

三人はもうこの世にはいないのだから。死んでしまっているのだから。

線香の煙が辺りに充満してきた。

「私、まだ何か忘れてる」

一番大事なことを思い出せていないような気がする。

スナック菓子の隣にまだ何か置いてあるような気がしたけれど、それを見ないようにして、逃げるようにその場から立ち去ろうとした。

でも、

霧のように辺りを包み込んだ煙の中で、私は足を掴まれた。

冷たい手だった。

(見ないでいいの?)

どこかで聞いたことのある声。

(見ていきなよ)

私の足を掴む手は、赤色をたらしと垂らしている。

(きっと、忘れ物、見つかるよ)

怖くて両耳をふさいだ。私の足を掴んでいる手を振り払おうと必死で足に力を入れてもびくともしない。煙がだんだん晴れてきた。みたくないものが今にも見えそうだ。

耳をふさいでいるのに、声は聞こえてきた。

(耳ふさいだって意味ないよ)

さっきよりもはっきりと。

(だって私は)

頭の芯から聞こえてくる。

(あなたなんだから)

血みどろの私がそこにいた。自分の声が呼んでいたのだ。

(家族での最後の旅行、楽しかったね)

線香は四本立っていた。

心の中で詰まっていたものが、すっ、と取れていく気がした。

私が納陵高校に合格を決めたお祝いに、家族で旅行をしたのだ。お兄ちゃんも大学進学が決まっていたからちょっと奮発してくれたのかもしれない。お互いにいろいろ忙しくなるだろうから、たぶんこれが最後の家族旅行になるだろうと思っていた。

その帰り道だった。トラックの事故に私たちの車は巻き込まれた。トラックの衝撃に耐えられるはずもなく、私たちの車は紙屑のようにぐしゃぐしゃになった。自分で見たわけではない。グシャグシャッという音がしたのだ。

そこまでしか覚えていない。気付いたら私は納陵高校にいた。

忘れていたことを思い出したからであろうか、血みどろの私は消えていた。

スナック菓子の隣には、動物の人形がそえられていた。

「私、もう、死んでたんだ」

ユウユウの手が特別温かかったわけじゃない。自分の手が冷たすぎるのだ。

目を開けていても涙が流れるし、目を閉じてても涙は止まらない。滲んだ視界を取り戻そうと冷たい手で涙をぬぐったら、目の前には二つの人影があった。

「ユウユウ」

呼んでいた。

「ユウユウ」

叫んでいた。

何度も、何度も。

声の方に駆け寄ってみると、そこには夕渚がいた。

「夕渚、お前……」

俺の中ではほとんど結論は出ているのだが、その結論を俺は受け止めることができない。あり得ないどうのこうのより、そんなことあってほしくない。もし俺の結論が正しいのだとしたら、俺は夕渚と一緒にいられなくなってしまうのだから。まだまだ思い出のアルバムとかいうやつ
のページは余ってるぞ。スカスカだぞ。これはこれから埋めるべきものなんじゃないのかよ。

そんな俺の葛藤を知ってか知らずか、少女は泣いていた。思いの雫を懸命にぬぐっているのだけれど、湧き出る泉のようにその涙は流れ続けている。

気付けばユメも駆け寄っていて、

「美園、お前は」

ユメの言葉を聞き終える前に、夕渚は頷いていた。

そして告げた。

「ユウユウ、ユメちゃん。あのね、私、もう死んでるの。入学する前にはもう、現実にはいない人だったの」

俺は膝から崩れ落ちそうだった。体にゾワっとした何かが駆け巡った。俺の結論を否定してほしいのに、夕渚の言葉は俺の結論が正しいことを物語っているから。

そう、夕渚美園は死んでいたのだ。

夕渚は泣いているけれど、声の調子は落ち着いている。きっと、すべてを受け入れたうえで話をしているのだろう。

自分で自分のことを「死んでる」と言うとき、その言葉はいったいどんな気持ちで覆われているのだろう。自分で自分が死んでいると気付いた時、その人はいったいどんな感情に襲われるのだろう。たぶん絶望を通り越した感情なのだろうけど、俺は絶望以上の感情を言葉に表す術を持っていない。言葉が感情を縛りつけている。

「私ね、中学の時あんまり友達いなかったんだあ。だからね、ずっと友達が欲しかったの。思ったことをそのまま話せる、信頼できる友達が」

ユメは言っていた。夢酔い人はこの世に何かやり残したことがあるから現実世界に現れるのだと。未練が現実を押し曲げて、夢酔い人をこの世に縛りつけているのだとするのなら、夕渚が残した未練は心から信頼しあえる友達をつくれなかったこと。

夕渚はその未練を果たせたのだろうか。俺は夕渚にとって信頼しえる存在であったのだろうか

か。後悔ばかりが湧いてくる。俺は夕渚に何をしてあげただろう。何もしてあげてないじゃないか。俺は夕渚のことが好きだったんじゃないのか？ いや、この際はっきりさせておこう。俺は夕渚のことが好きだ。初めって会ったその時から。だったら何でもっと優しくしてあげなかったんだよ。もっと一緒にいてあげなかったんだよ。

そんなの答えは簡単だ。『おフロ研究会』を含めた俺と夕渚との時間がもっと先まで続くと思っていたからに決まってる。こんなに早く終わるなんて、想像できるはずがない。

かけがえのない夕渚との時間を、もっと大切にすべきだった。もっとたくさんの色を使って、思い出のページを綴るべきだった。

「ユウユウ、昨日言ったでしょ。家族とあんまり話せてないって」

「言ってたな」

この一秒だって大切なはずなのに、何でもっといろんな言葉で返さないんだよ。もっとたくさん語りかけてあげないんだよ。夕渚との会話に、夕渚の声に、もっと触れていたいはずなのに。夕渚の言葉が恋しいはずなのに。

「私、バカだから気付かなかったの。みんな死んじゃってた。話せるわけないよね」

あの時の夕渚は、笑っていた。笑っているけど泣いていた。でも今の夕渚は違う。

泣いている。泣いているけど、笑っていた。

悲しいはずなのに、必死で笑っている。

「でも、私寂しくなかったよ。ユウユウやユメちゃん、『おフロ研究会』のみんながいてくれたから」

いるだけでよかったのだろうか。それだけで本当に夕渚の心は満たされたのだろうか。

オフィス街の街並みは、こんなときでも無情で冷たい。

「よかったあ。死んでるって気付く前に、友達いっぱいできて。ユウユウと手だってつないじゃった」

夕渚は無邪気に笑っている。

「死んでるなんて何度も言うなよ。なんか……、本当に……、死んでるみたいじゃないか」

もう俺も夕渚の死を受け入れようとしているのに、思いと言葉というものは、どこまで裏腹なものなんだろう。

涙の軌跡を輝かせながら、少女は微笑していた。

「ユウユウ、ごめんね。私、本当に死んでるの。気付いちゃったの」

覆ることのない事実を前に、今の俺には何ができるだろう。

無理してるとわかる程に、少女の仕草は痛々しい。支えてやらないと崩れてしまいそうだ。

「私、これからどうなるんだろう」

少女が零した言葉に、ユメが気丈な面持ちで答えた。

「あちしが喰う。美園はきっと天国に行ける」

泉のように湧き出ていた夕渚の涙はその勢いをおさめ、今は少女の頬にその痕だけ残している。夕渚はふわりと笑って、

「天国かぁ。ほんとにあるのかなぁ。あったら家族に会えるかなぁ」

遠い空を見上げていた。

「ユメ、何とかならないのかよ」

俺はユメの肩を揺すっていた。自分には何もできない。でも、抵抗せずにはいられない。無駄な抵抗だなんて笑うやつがいるかもしれないが、そんなことはどうだっていい。何かしないと気が済まない。じゃないと、じゃないと、俺の思いはどこにぶつければいいんだ。俺の思いはどうやって昇華すればいいんだ。

「何とかってなんだ」

こいつにとっては、『夢酔い人』を喰うのは当たり前のことなのかもしれない。ユメは冷静を保ち続けている。

「夢食えたり、死んだ人が歩いてたりする世界があるんだから、死んだ人をよみがえらせる方法ぐらいあるだろうよ！」

思わず大声をあげていた。

「ない」

答えは一言だった。

「夕渚が現実世界にいてなんか不都合なことがあるのか」

なんとかして、夕渚と同じ時間を過ごしたい。これはもう自分のエゴでしかない。ユメにそのエゴをぶつけても仕方無いとわかっているのだが、自分の気持ちをコントロールしきれない。

「今はない。でもそのうち出てくる。死人が歩いてる世の中なんてあり得ない」

もはや常識論は、火に油を注ぐ以外の何物でもなかった。

「ないならまだ食う必要ないだろ！ 不都合が出始めてからにすればいい！」

なんて非常識なことを俺は言っているのだろう。

「チイ、でも……」

ユメは続く言葉を紡ぎだそうとしているのだが、震えたまま黙り込んでしまった。

ユメは冷静な顔をしたまま、声を殺すように、唇を噛みしめながら泣いていた。つうつと涙が頬を伝っている。

自分のことが恥ずかしくて仕方なかった。ユメはわかっていたのだろう。この場で自分が泣いてはいけないと。そして自分に言い聞かせていたのだろう。すべてを理解している自分だけは取り乱してはいけないと。気丈にふるまわなければいけないと。

ユメの続きを紡ぐように、夕渚が語ってくれた。

「ユウユウは優しいよ。優しい。でもね、優しすぎるの。私ね、みんなに会えなくなるのは嫌だよ。すっごくいや。明日のパーティーだってね、行きたくてしょうがないの。でも、さよな

らするなら今がいい。だって、だって、一緒にいた時間が長いほど、楽しい時間を過ごせば過ごすほど、さよならするのが辛くなるから」

二人はなんて強いんだ。そして、自分のことしか考えられない俺は、なんて子供なんだ。

「チイ、そろそろ朝だ」

「だからなんだよ」

「話をするなら最後にしてくれ。そろそろ喰うぞ」

マジかよ。こういうときの時間ってやつは何でこんなにも早く過ぎ去ってしまうのだろう。最後にする話？ いったいどんな話をすればいいのか俺には皆目見当がつかないね。話したいことなら山ほどあるわけで、いっそのこと最後の晚餐にはどんな話をしていたのか参考にさせてもらいたいくらいだ。

こういうときってよく言うよな。自分の気持ちに正直になりなさいって。やっぱり言っとくしかないか。さっきの俺はなんて言ってた？ どうやって昇華すればいいのかわからない？ なにかっこいい言葉使ってたよ。昇華させる方法なんて一つしかないじゃないか。自分の気持ちをどこにぶつければいいのかわからない？ 馬鹿なこと言ってんじゃないよ。夕渚にぶつければいいじゃないか。ほんとに人間ってのは頭ばかりでかくなって、肝心なところで一步を踏み出せないんだよな。待てよ、もしかしてこれは、時音の言ってたモジモジくんとかいうやつなんじゃないのか。勘弁してくれよ。って、なんだか頭の中がすっきりしてきたな。伝えようって心に決めたらこんなにもすっきりするものなのか。ほんとに人間ってのは単純な生き物だよな。まあ、告白ってのはこんな状況でするようなもんじゃないんだらうけど、言わないと一生後悔する気がする。

男の決意を胸に秘めながら改めて見る夕渚は、ずるいくらいに可愛かった。

「夕渚、俺、お前のことが——」

「ユウユウ」

俺の一世一代の大告白を遮って、最期に見せてくれたのは、ひまわりのような笑顔だった。

「私、ユウユウのこと好きだよ」

その言葉、せめて俺に言わせてくれよ。なんて、ため息をついていると、

「ユメちゃんのこと好きだよ」

おいおい、そっちの好きかよ。俺の一世一代の決意をどうしてくれるんだよ。

「『おフロ研究会』のメンバーみ～んな、だぁ～い好き」

まったく、俺の方が浮かばれないね。

「瑠璃ちゃんのケーキ食べたかったぁー」

最後はケーキの話かよ。

言いたいことを全部言い終えたらしい夕渚は、

「ユメちゃん、私、目閉じてるから。全部食べてね。痛くても我慢するから、残さないでね。」

静かに飲み込まれるから。だから、だから」

夕渚の腕にはリストバンドがはめられていた。そのリストバンドを抱きしめるように胸にあて、九つの絆をかみしめるようにして、夕渚は立っていた。

「私のこと、忘れないでね」

これが本当の別れというやつなんだろう。

「忘れない。あちしとチイの記憶にしか残らないだろうけど、あちしたちは忘れない」

「忘れないさ。ユウユウなんてあだ名をつけたやつを忘れるわけがないだろ」

俺の一世一代の決意はどこへやら。

涙は流れなかった。夕渚の記憶を留められる俺たちは、きっと幸せなんだろうから。

俺は二人から少しだけ距離をとった。それでも夕渚の声はちゃんと聞こえた。

「ユウユウ、ありがとう」

「どういたしまして」

いったい何に対しての感謝なんだよ。

「ユウユウ」

「なんだ？」

「ユウユウの手、温かった」

「お、おま」

照れるっつーの。

「ガァ——ブツツ」

目が覚めた。

遮光カーテンのわずかな隙間から落ちてきた太陽が、朝の香りを運んでくる。

起きてもやっぱり、涙は流れなかった。

「まったく、ユメのやつ」

最後まで人のペースに合わせてくれなかったユメに対してぼやきを入れつつ、こんな日でも俺は学校へ行く準備を整え家のドアノブを回しているのだった。

「行ってきます」

。

高校までの道のりはいつもと変わらず、外の気温も昨日と変わらなかった。相変わらず、憎いくらいに太陽が堂々と俺たちを見下ろしている。

ただ少しだけ、周りの景色が鮮やかに見えた。

納陵高校の近くまでやってくると、これまたいつもと変わらない生徒たちの登校風景を見る

ことができた。制服や歩調だって、昨日と一切変わってない。

こういう日に限って俺は登校中に顔見知りのやつと顔を合わせることがなかった。

聞きたいことがあるっていうのに。

はっきり言って俺は、昨日見た夢は単なるごく普通の夢だったんじゃないかと思ってる。俺からの一方的な期待だ。そこに一縷^{いちる}の望みを見出してるって言うのもいい。もしかしたら、神様のお告げだったんじゃないかとすら思っている。「未来を期待しちゃいけない。今を大切に生きなさい」っていう。だから俺は決めたんだ。告白しようって。

一年七組の教室のドアを開けると、

「おっす！ 孝司」

尾村がいた。

「なあ、尾村」

一縷の願いを託して聞いてみる。

「夕渚美園って知ってるか？」

いつものひょうひょうとした顔で、尾村は答えてくれた。

「誰だそれ？ 知らねえ」

俺の願いはもろくも崩れ去った。床に沈んでいきそうになった俺は、何も言うことができなかった。ただ唇をかみしめることしかできなかった。昨日起こったことは、幻なんかじゃなかったのだ。

今日もだるそうな顔をして通りかかった斗真を呼び止めて、

「なあ、斗真」

「おお」

「いや、やっぱいい」

「おお」

やっぱり訊くのはやめておいた。俺が呼び止めた理由など全く気にしない様子で斗真は自分の席へと戻っていく。

揺らぐことのない現実を前にしたら急に、淡い幻想にしがみつこうとしていた自分が恥ずかしくなってきた。別れ際の夕渚は言っていた、「忘れないでね」と。俺とユメしかあいつのことを覚えていないかもしれないけど、夕渚は今でも俺の中で笑ってる。そう、笑ってるんだ。あいつはすべてを受け入れていた。その強さがまぶしかった。他のやつらの記憶に残っていないとしても、俺の夕渚に対する思いは揺るがないのだから、自分の中で大切にしまっておこう。この日はなんだか、そう思えることができた。

いつもと変わらないチャイムの音が、授業の始まりを告げていた。

特に夕渚の話題に触れることなく、気付けば放課後の時間を迎えていた。時間というやつは

いつでもあわただしく過ぎていく。たまにはゆっくり休めばいいのに。

手にぶら下げたお菓子の袋が、少しだけ重たく感じた。

部室の扉の前でかわいそうなくらい適当にぶら下げてあるかまぼこ板に、なぜだか笑いが込み上げてくる。

視線はかまぼこ板に夢中なのに、知らないうちに俺の手は扉の取っ手を掴んでいて、ガラガラッと部室の扉を開けていた。

やっぱり一つ足りなかった。ピースが一つ欠けているのに、誰一人、欠け落ちたピースを探していない。この部室と言うキャンバスの上には、鮮やかすぎる七枚のピースが躍っていた。

とにかくやかましい。

ドアの真横にはユメがいた。

「チイ、昨日は感動的だったな」

なんだかうつむき加減で、いつものような晴れやかさが無い。

「そうだな。でも俺は振り返らないさ。前を向いて生きていこうと思う。だからお前もあんまりくよくよしてるんじゃないぞ」

やっぱり昨日のことを気にしているのだろうか。どことなくモジモジちゃんになっている。

「そ、そうか。あの、その、……先に謝っとく。ごめん」

昨日の別れ際のことを言っているのだろうか。

「な、なんというか、チイの夢を食ってから美園の夢の中に行けばよかったなあ。腹が減っては戦はできぬ、って言葉の意味がよ〜くわかったというか……」

「ああ。気にするな。俺は夕渚の最期を見たからって、べつに落ち込んだりしてないから。それに、そう言えばそうだよな、昨日は俺の夢食べ損ねちまったんだよな。今日は馬鹿騒ぎするだろうから昨日ほどではないにしてもそれなりにうまい夢になってるはずだ。食べに来てもいいぞ」

俺はポンとユメの肩を叩いて、部室の中程に入っていった。

「いや、チイ、その……」

グウウウ〜〜〜

そんなに謝らなくてもいいさ、ってな感じで、お腹をならせつつ俺を引きとめようとするユメの前を去っていった。

いやあ、それにしても、ほんとにやかましいな。

特にコイツ。

「タカジイはちゃんとお菓子持って来たわよね？」

このお嬢さん、なんか怒ってないか？

「持ってきた」

右手に持っているスーパーの袋をひょいっと持ち上げて、お菓子の無事を確認させる。

「やっぱり、タカジイと池中くんは信頼するに値するわね」

見ると時音の前には礼二がいて、「撃たないでください！」みたいな感じで両手を天井高く突きあげている。

「礼二、お前なんかしでかしたのか？」

自分の中に殻があるのなら迷わずそこに逃げ込みたい。という表情で俺に助けを求めている礼二の代わりに、銃口のようにおっかない視線を浴びせ続けている時音が答えた。

「聞いてよタカジイ。礼二ったら昨日買ったジュースを家で全部飲んじゃったんだって。あり得ないでしょ？ 三本もあったのよ三本も。絶対昨日の夜オネショしたと思うのよ。学年中に言いふらしてこようかしら」

まったく、救いようのないバカだな礼二は。それと時音よ、お前はいつの日か名誉棄損罪で訴えられると思うぞ。ほどほどにしとけよ。

「礼二、今すぐ買って来なさい！ 三本じゃ許さないわ。倍よ、倍。六本買ってきて。もちろん、自腹でね」

「マジかよ」

「マジよ」

寂しそうな財布の中身をのぞきつつ、礼二は部室を出ていった。みんな忘れてないか？ 今日の主役は礼二なんだぞ。ご愁傷様なやつだ。自業自得だけどな。

部室の真ん中ではハイと立也がオセロをしていた。

「ふむふむ。四方固めの陣できたか。だが戦は最後までどうなるかわからんからな。反乱軍が立ち上がるやもしれん」

なこと起こるわけないだろ。

「先輩、たぶん僕、勝ちます」

四隅を支配した立也が優勢とみて間違いない。また真っ黒にされちまうんだろうな。

その隣では長沢が自作のケーキを慎重に切り分けていた。

「う～ん、難しい」

悩んでいる長沢に時音が歩み寄り、

「適当でいいのよ、適当で」

とか言ってケーキを適当に分け始めてしまった。あ～あ、ケーキ争奪のために血の雨が降ることは間違いなさそうだ。

ふと見た部室の窓は開いていた。

スカイブルーに浮かぶ雲の波と戯れながら、鳥たちが自由に羽ばたいている。

「こっちだぞー」

部室の隅からもうすぐ六月だとは思えないほどの冷気を感じつつ窓枠にもたれかかっていた俺は、自然とこんなことを口にしていった。

尾村は知らないって言ってたのに。もう夕渚はいないのに。

—————。

いや、待てよ。

そもそも尾村と夕渚は言葉をかわしたことがあるのだろうか。俺も夕渚を紹介した覚えはないし。もしかして、最初から尾村は夕渚の名前なんて知らなかったんじゃ—————。

「めちゃくちゃおいしそうね。もう待てないから先食べちゃいましょう。みんな～ケーキ選んで～」

なんだか重大なミスを犯してしまったような気がするのだが。

「ちょっと待てよ！ お前らフライングだろ！」

大きな箱の中にはケーキが切り分けられてあった。

まだ分けられてない紙皿。

積まれたままの紙コップ。

コンビニでもらってきたのであろうプラスチックのフォーク。

ガラガラガラ

ドアが開いた。

箱の中には見事にデコレーションされたケーキが入っていた。フルーツなんかもきれいに盛り付けられている。おまけにチョコレートまで添えてある。

でも、

大きさはバラバラだった。

一つ一つ、全部違う大きさ。

砂漠で道に迷い、死にそうなほど喉が渴いた人たちは、時にオアシスの幻想を見るという。その強い思いゆえに、幻は姿を現すのだそうだ。

ならば今聞こえてきたのは—————

「ユウユウ」

ただ一つだけ言えること。

聴覚より視覚の情報を重視している今の俺の状況において、決して幻ではないこと。

それは切り分けられたケーキの数。

個性あふれるケーキたちは、

間違いなく、

九つあった。

世界は俺たちが思っているより、広くて、深くて、優しいのかもしれない。